
ライオンハート

黒猫時計

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライオンハート

【Nコード】

N1480R

【作者名】

黒猫時計

【あらすじ】

ブリタニア王国のロザリア騎士団に所属する主人公、ヴィクトル・ノーティスはその副団長を務めている。

そんな彼には夢があった。

『ライオンハート』

それは騎士最高の栄誉とされる称号。未だその称号へと至った者が1人しかいない、幼き頃より夢見し栄光をいつかこの手に掴むと誓う。

そんなある日、ブリタニア王国の姫様から勅命を受けることに……。

その派遣先はなんと、あの黒竜ファフニールのいる大陸だった――。

※同シリーズである「小さな魔女とファフニール」の1年ほど後の話になりますので、まだお読みでない方はそちらからお読み頂けるとよろしいかと思えます。

◇オムニバス短編集ジョブ・ストーリーの3作目です。

夢のまた夢

『起き———いっ！ 聞こ———か！』

ん？ 五月蠅いな……一体、なんだよ……。

『起——んか！ この馬——の——！』

あ？ この声は……団長、か？ 人の気持ちのいい眠りを妨げるとは無粋なオヤジだな。

「副——長！ ——おい、起きろっ！ 馬鹿者——！」
「いてっ——！」

怒鳴り声が聞こえていたかと思った次の瞬間、俺は頭に強い衝撃を受けて目を覚ました。半覚醒状態なためか、まだ視界が微かにぼやけて見える。

少しずつ目が光に慣れピントが合い始めると、目の前に見知った髭面の男が立っているのが見えた。鎧の上からでも分かる屈強な体格。その顔は数多の戦歴からか傷だらけで、左目には眼帯が当てられている。

その男は相当怒っているようで、こめかみに青筋を浮かべ顔を真っ赤にして何かを喋っている様だが、今の俺にはそれがハッキリと頭には入ってこなかった。

「貴様、それでも副団長か！」

しばらくしてようやく耳に入ってきた言葉。しかし俺はそんなことよりも気がかりになっていることがあった。

俺は確かベッドで寝ていたはず。なのに何故、今こうして立ち、しかも騎士団長に殴られ怒鳴られているのか、皆目見当が付かない。しかしそんな混乱状態の俺を余所に、団長はまるで機関銃のように説教文句を口から乱射している。

「自覚が足りんのだお前は！　また見習いからやり直すか！？」

ん？　見習い……だと？　ふざけるな！！　俺がここまで来るのにどれだけ……あ、分かったぞ。これは夢だ。夢を見ているに違いない。よくあるだろ？　夢から覚めたらまたそれも夢だったってやつ。

さすがに普段はここまで怒られたりはしないからな。……そうと分かれば。

俺は普段から騎士団長へ募らせている溜まりに溜まった鬱憤を、夢と言う絶好の機会を逃すまいと攻勢に出て晴らすことにした。

「うっせんだよ、クソじじい！」

「何っ！？」

「黙って聞いてりゃ調子に乗りやがって」

「貴様、それが団長に対する態度か！」

「それだよそれ。団長だからっていつも偉そうにしゃがってよ。めんどくせえ仕事は全部俺に押し付けやがって」

俺の反抗的な言葉を聞いた団長のこめかみには再び青筋が立ち、顔が見る見るうちに赤くなっていく。

ははっ、いい気味だ。まるでレッドコボルトだな。

「これは夢だからな。今まで溜めたストレスを今ここで発散してや

る」

「夢、だと？」

「そうだ。俺の夢だ。人の夢の中に土足で入ってきやがって！　さつさと団長の座を俺に譲り渡しやがれ！」

「ほう、それが貴様の本音か」

団長が目を細めて俺を見る。他を威圧するこの視線、普段の俺なら間違いなく多少ビビるところだが……今は俺の夢の中だ。こんな視線如きに臆することなどない。

しかし先程から少々引つかかっていることがある。団長と2人きりだと思っていたのだが、どうやら団員達が後ろにいるようだ。ひそひそと、まるでこれから起こりうるであろう惨劇を予想して、団員同士で俺の未来を案じている声が聞こえてくる。

そんなに心配しなくても……これは俺の夢の中、だぞ？

何かがおかしいと思った瞬間に、後ろの団員達の中から俺に進言する声が響いた。

「ふ、副団長、これは夢ではないですよ！！」

まったく、こんな状況で度胸のあるやつだな。団長の話の最中、私語をしただけでスパルタ的罰が与えられると言うのに。

例えば、城内をうさぎ跳びで100週とか？　ただでさえ広い城内を、走るよりもきついうさぎ跳びで体力的に、そして城内には貴族の連中などが往来している。いい笑いものにされるために精神的なダメージを負わされる。

ちなみに俺は、自慢じゃないが3度ほど経験済みだ。あの屈辱はなかなか味わうことが出来ない。おかげで多少精神攻撃の類に対し

ての抵抗力が身に付いたようだ。

「はぁ？ 夢に決まってるだろ。夢のまた夢ってやつだ」

俺は振り向いて団員達へ向かって高らかにそう宣言すると、振り向き様に団長へ言ってやった。

「もういい歳なんだ、ゴブリンにでも殴られてコロツと逝っちまった方がいいんじゃないか？」

からかう様に放ったその言葉を聞いた騎士団長は、怒りが頂点に到達したのかまるで鬼のような形相で俺を睨みつける。と同時に後ろから、ヒィーッという掠れた悲鳴のような声があちらこちらで湧きあがった。

……ゴブリンはさすがにないか。団長はこう見えても俺よりも強い。……まあ当たり前なんだが。

ゴブリン如きの名前を出したから怒ったのか？ でもまあ夢ならどうでもいいことだ。

「なら、本当に夢のまた夢とやらの飛ばしてやろうか？」

眉毛は吊り上がり団長の右目が怒りに燃えている。だが俺は臆することなく言い放った。

「ハッ！ これは夢だから痛くも――」

そこまで口にした次の瞬間、団長は目にも留まらぬ速さで手にした槍を思いっきりスイングし俺の頭部を横に薙いだ。そのインパクトは凄まじく、常人ならば間違いなく即死級だ。普段通りに兜を外

していたならば、今の瞬間、間違いなく俺はあちらの世界に旅立っていたことだろう。

「いてえっ!!」

夢が覚めるほどのあまりの痛さに……って、あれ??

俺……起きてるのか? これ、夢じゃ、ないのか……?

……ヤバイ!!

気付いて団長の顔を見た時既に遅く、団長は槍を大きく上に振りかぶって、それは振り下ろされている最中だった。

「うわっ!?!」

ブンツという轟音と共に振り下ろされた槍を、なんとか紙一重で後ろに飛びずさりかわすと、俺はそのまま騎士達を押しつけてこの場から走り去る。

逃げるが百計ってやつだ。トンズラとも言うが。ここにいたら間違いなく殺される! ほとぼりが冷めるまで身を隠すのが吉! と思っていたら、なにやら後方から怒鳴り声が聞こえてきた。

「罰として貴様は城内うさぎ跳び200週だっ! 分かったな!

副団長!!」

「は、はいっ!」

出た。今までの最高記録。しかも4回目にして城内200週とか……。しかも俺返事しちまったし。

ただの体力馬鹿になっちゃうな。まあ騎士のパーティーでの主な役割なんか、敵陣に突っ込んで敵の注意を引き囿になるタンカーばかりだしな。体力なけりゃ話になんねえけど……さすがに200は

ないぜ。

つうかあいっつらさっさと教えろよ。また余計な仕事が増えちまったじゃねえか。

ぶつくさと文句を垂れながらも、なんとか騎士団寮のブリーフィングルームから逃げ出した俺は、気付いた時律儀なことに城内へと足を踏み入れていた。

騎士団寮はその名の通り、ブリタニア王国に忠誠を誓った騎士達の為の宿場だ。騎士にジョブチェンジした者は必ず寮に入れられる。よってその大きさも半端じゃなくデカイ。

総勢5万5千人ほどを収容する騎士団寮からヴァルワール城までは歩いておよそ5分程。王国の持てる技術を駆使して建てられた、世界3大名城にも称えられるヴァルワール城。その広い回廊に俺は今立っている。

辺りを見渡すと、よく分からない抽象画から人物画、風景画などが一定間隔を空けて飾られていた。それを貴族達が見上げては批評し合い談笑している。この回廊は別名「美術回廊」とも呼ばれ、今まで王国が集めてきた絵画などの美術品の一部を一般開放している場所でもあるのだ。

……って、なんで今日に限ってこんなに人が多いんだよ！　こんな中でうさぎ跳び？

冗談じゃない！　やってられっか！！

俺はそのままふけようと踵を返したところで立ち止まる。そして思い返す。団長のあの怒りに満ち満ちた目を。……夢だと思っていたからあの時はどうということもなかったが、今思い返してみると、あの目付きは間違いなく殺しに掛かる時のものだった。

志半ばで戦死、なんてことはよくあるが……こんな所で死ぬわけ

にはいかない！ 俺には夢があるんだ！

これ以上団長の逆鱗に触れぬよう、俺は覚悟を決めてうさぎ跳びを始めることにした。

まずこのクソ重い甲冑を脱ぐ。俺の今のクラスは副団長だ。よって上級騎士以下の者たちよりも上位の装備で身を固められる。そのため装備の重量も多少重くなるのだ。防御力が上がればその分生存率も上がる。それに力と体力も少し上がるため、俺は進んで重い装備を身に着けるようにしているのだが……。うさぎ跳びの時だけは別だ。こんなことの為に馬鹿みたいに体力を使うことはない。しかも200週。

目標は3時間を切ることだ。以前よりもレベルが上がっている為、多少楽にはなっているだろう。

「よし、始めるか！」

鎧兜を回廊の隅に一箇所に纏めると、レザーチュニックにレザーパンツといった貧相な格好でその場にしゃがむ。今日は寝坊したため、インナー装備を選んでる暇がなかったのだ。生活習慣の悪さがこんな所で仇となって現れるとは……。今度から気をつけよう。

手を後ろ手に組み勢いを付けてジャンプ。そしてまたジャンプと、延々ジャンプを繰り返していく。そんな俺に気付いた貴族達が好奇心な視線を注いでくる。

ふん、もう慣れたから気にしない。そんなことより、お前達は絵画でも見てろ、この暇人が。

俺は視線を気にせず、ただひたすらにうさぎ跳びを行う。すると前方にくたばっている1人の騎士を見つけた。格好は俺とそう変わらないため階級の判別は難しいが、恐らく見習い騎士だろう。そい

つも同じくうさぎ跳びをやらされている様だ。

「よう。大丈夫か？」

「ぜえー、ぜえー、はあー……はあー。あ、こ、これは副団長殿！」
「随分と辛そうだな。お前はなんでうさぎ跳びやらされてんだ？」

今にも酸欠で倒れかねなさそうな見習い騎士の隣で止まると、俺はその理由を聞いてみた。

「わ、私は……何をやっても駄目なんです。何をやっても失敗ばかりで……。この前も、初実践でモンスターと戦ったのですが……間違えて味方に切り付けてしまって……」

……あちゃー。それは駄目だろう。つうかモブと人間間違えるって……ブッ!!

おおっと、いかんいかん。仮にも俺は副団長だ。悩んでる奴を目の前にして笑うなど言語道断だ！

とは言いつつも、笑いを堪えるのに必死で、今の俺の顔はその格好と相まって、傍から見たらとても滑稽に見えるだろう。

「そうか。まあそういうこともあるさ、生きてればな」

「……そうですか。……ところで副団長殿はなぜうさぎ跳びを？」

「ん？ ああ、ミーティングの時に居眠——」

「……?？」

「ゴホンッ！ お、俺はまあ、自主トレだ」

あ、危ない。下位の騎士たちの見本にだの何だのと、団長から耳にたこが出来るほど言われ続けてるってのに、こんな所で俺の情けない一面を曝して、見習い騎士の夢や希望を汚してはいけない。

俺の言葉を聞いた騎士は、おぉー、とても感心している様子で目を輝かせて言った。

「さすがです、副団長殿！」

「まあな。真面目にやればうさぎ跳びだって立派なトレーニングだ。メリットもあるしな」

「メリット、ですか？」

「そうだ。これをやることによって強靱な脚力が身に付く。するとどうだ？」

そう俺が問いかけると、騎士はうーんと唸って少し考え、そして答えた。周りから見たら、二人して手を後ろ手に組み、しゃがんで真面目そうな話をしている俺たちを、おかしな奴らだと思うかもしれないが、今はそんなことは気にしない。

「跳躍力が上がります」

「うん、まあ確かにそうだな。使えるスキルも増えるだろう。それもあるが、何よりも逃げ足が速くなる」

「逃げ足、ですか？　しかし敵前逃亡は――」

明らかにそれは軍規違反なのでは？　といった心配そうな顔を向ける騎士に、俺は声を張り上げて言った。

「馬鹿野郎！　命あってのもんだろう？　生きてればその内リベンジ出来る日が来るかもしれないだろうが！」

「はっ！　も、申し訳ありません！！」

「うん、分かればいいんだ」

……まったく、いつの時代の軍規だよ。そんなもんまだ騎士学科で教えてるのか？　遅れすぎだろうが。……っと、軍規なんかまと

もに読んだことのない俺が言ってみる。

「まあ、俺は先に行くが……お前も頑張れよ」

「はっ！ 副団長殿のようになれるよう頑張ります！」

うう、眩しすぎる！ 俺はお前とは違うんだ。そんな輝かしい瞳で俺を見つめるんじゃない！

幼少期の俺にもこのくらいの熱意があったなあとしみじみ思いながらも、俺は見習い騎士の青年を置いて先に行くことにした。

——いったい何週したのだろうか……。いや、たぶん3週くらいだが。

そんな時、ひたすらうさぎ跳びを行う俺に、横から急に誰かが話しかけてきた。

「まうたやらされてんだ？」

聞き覚えのある声だった。しかし、ジャンプの勢いを付けすぎて急に止まることが出来ず、俺はそのまま前のめりになって倒れる。後ろ手に手を組んでいたため、顔から床にダイブする形となってしまった。

俺は急いで手を付いて起き上がり、笑い声のする方へ視線を向けると、そこにはメイド服姿で壁にもたれ掛かり、腕を組んでこちらを見つめる女が立っていた。

「げっ！？ シャスティ」

「失礼ね！ “げっ”とは何よ“げっ”とは」

「っておい、そんなことよりまたとは失礼なやつだな。俺はまだ4回目だ！」

「4回もやらされてれば、立派な常習者でしょ……」

紹介しよう。こいつの名前はシヤスティ・メイラー。俺の幼馴染だ。幼少時代からの言わば腐れ縁で、俺が騎士を志すようになると、それなら、とどういうわけかこいつは給仕として城勤めをするようになった。

今はカチューシャを付け、後ろ髪をアップにしているので長さは分かり辛いが、実際髪は長い。背中の真ん中辺りまで伸びる綺麗な栗色の髪で、顔も比較的整っており、黙っていれば“そこそこ”の美人なのだが。……はつきり言おう。俺はこいつが嫌いだ！

何かあるごとに逐一チクリやがる。きっと今のこれだって……。

「おい、姫様には言うなよ」

「何をかな」

きいーっ！！ 鼻で笑いやがって！

俺はクスクスと笑うシヤスティを見上げながら、大人げもなく声を張り上げた。

「お前のせいでいつもいつも俺はな！ あの能天気で脳タリンな姫にチクチクチクチクと説教垂れられてんだ！」

「そんなのあんたが悪いんでしょ？ それよりもさ、あんたまた何かやらかしたの？」

「何かって何だ、失礼な。さっき見習いにも言ったけどな、俺は“自主トレ”だ」

「ホントかな？」

「本当だ！」

「……ま、理由なら知ってるけどね」

——知ってんのかよ！！

目の前で声を押し殺して爆笑しているシャスティに、俺は哑然として何も言えなかった。

こいつと喋っていると本当にテンポが狂う。そして疲れる。誰かこいつをどうにかしてくれ……。と言ったところで誰にどうしろとも言えず、手をこまねいている俺を尻目に、腹を抱えて辛そうに笑うシャスティは息を整えて話を続けた。

「だってブリーフィングルームから団長さんの声聞こえてたし」「なんて？」

そう聞き返すと、シャスティは思い出すように少し頭を傾げ、モノマネを交えながら言った。

「えーっと……副団長のようにはなるなよ！ 私の話の最中“居眠り”など言語道断だ！！ あのようなことをしようものなら、今以上の厳しい罰が与えられると思え！！ 話を戻すが、諸君らは私と共にこれから遠征に向かってもらう。見習いの教育も兼ねるので声を掛けておけ。……で、あんたは留守番だって」

「何っ！！ 俺が留守番……？」

あのクソオヤジ！ 俺を置いて行く気か？

つかコイツ給仕の仕事投げてどこほっつき歩いてんだよ。……しかし今はそんなことは重要ではない。

今の話が本当ならば、俺はチャンスを棒に振るかもしれないのだ……。頭を抱え、俺は叫んだ。

「せっかくのレベル上げの機会がー！！」

「レベル上げ？ あんたまだ夢諦めてなかったの？」

「当たり前だろ。俺がなんの為に騎士やってるのかお前は知ってるだろ？」

「うん、まあ」

そう。こいつには、何を血迷ったのか、幼い頃に自分の夢を話したことがある。

……あれは7歳の頃だ――。

夢と憧れと

幼かった俺は騎士というジョブに対してただ単純な憧れを抱いていた。

両親の話によれば、母の腹の中にいる頃から、ある童話を読み聞かせられていたらしい。その童話は騎士学校の初等部に上がる頃まで俺の愛読書だった。

絵本を読んでは空想し、騎士のかっこよさに憧れるようになったんだ。

その童話の名前は『獅子の心』

物語は実在した人物の伝説をモチーフにしていた。主人公の名は

「レオン・ガフ・ブリタニア」

そう、このブリタニア王国の初代国王だ。

レオンは妻子を持ちながらも人生の大半を、その身を戦場に捧げたという。ここだけ聞くと、妻と子をほったらかしにして戦いに明け暮れている駄目な父親のように聞こえるかもしれない。だがそれはこの国の明日を、未来を思い、愛する家族、そして民を守ろうと命を賭した結果だ。

しかも彼は、王だからと戦場の後方で指揮を執り、危なくなったら一目散に逃げ出すようなそこの王とは違った。自らが戦場の最前線で指揮を執り、常に自身の身体を死地にやり戦闘をしていたそうだ。

そんなレオンの勇猛果敢さ、そして死をも恐れぬ揺ぎ無い心。その戦いぶりから人々は彼をこう称えた。獅子心王^{ししんおう}『ライオンハート』と。

そしていつしかこのライオンハートという名は、騎士の最高の栄誉ある称号とされるようになった――。

俺がライオンハートは実際にある称号だと知ったのは中等部にいた時だ。こう見えてもガキの頃は真面目な騎士見習いだった。……って自分で言うのもなんだけど。

初めて行った王立図書館。その古文書部屋に入った時だ。好奇心から、獅子心王について調べてみようと思い、数日間にかけて通いつめた。

王国に関する書物から世界の歴史、他国の魔道書や魔法への対応の仕方が書かれたものなど様々ある中で、俺が見つけた一冊の本。

それは相当分厚く、しかも表紙と裏表紙の唐草模様は金で装飾されていた。背表紙には王家の紋章がプラチナで施された豪華なものだ。中を開いてみると、長い月日が経ち酸化して黄色くなった高そうな羊皮紙が、所々ボロボロになっていて歴史を感じさせる。

傷を付けない様に手袋をし、慎重にページをめくり中を読み進めていった。

すると見つけたページの中ほど。そこに書かれていたのは、獅子心王レオンの死後、ライオンハートの称号を得たとされる騎士の名前だった。

『中略。1146年7月26日。ライオンハートの称号を以下の者に授与した……カロン・グラデイス――』

彼以外の名前はそれ以上書かれていなかった。つまり、3000年以上続くこの王国の歴史上、レオンを除いてライオンハートの称号へと至った騎士はたったの1名だけ。

遥かに遠い。その時の俺はそう感じたが、しかし同時にいい収穫

だった。ライオンハートは伝説級だが伝説じゃないという事が分かっただけでも、真面目に図書館に通った苦勞が報われるってものだ。

それからの俺はただひたすらに訓練や戦闘に明け暮れた。騎士見習いからやがて下級騎士に昇格。そして中級、上級とクラスアップし、19歳という若さで今現在の副団長の地位まで上り詰めたのだ。ここまで来るのに苦勞がなかったわけではない。

モンスターに襲われて死にそうになったこと……まあその時は逃げた。リザードマンの大群に追い掛け回されたこと……この時もまあ逃げたが――。

って、今思えば結構逃げてきたな。ライオンハートの受勲条件に影響がなければいいが……。

カロンはどうだったのだろうか？ レオンはまるで参考にならないから気にはなる。

レオンが参考にならないと言ったのには理由があり、彼は戦場で敗北したことが一度もないからだ。敗北がなければ逃走もない。だから俺にとって参考にすべきはカロン・グラディスだろう。

これも調べた時に知ったことだが、カロンはある異名を持っていた。それは『竜殺し』

ドラゴン相手に戦うんだ。一度や二度の逃走くらいは経験しているはず……だと思う。

俺は腕を組み、眉間に皺を寄せて考え込んだ。

「なに難しい顔してんのよ」

聞こえた声にハツとした。回想に耽っていた意識を、現実へと引き戻したのはシャスティだった。相変わらず壁にもたれてだるそうにしながら俺を見下ろしている……。って、俺はいつまでこんな格好してるんだ。

離れたところにいる貴婦人達が、こちらを見るなりひそひそと話をしているのが目に映る。「なんですのあのはしたない格好は」だと。

たしかに……しゃがんで前で腕組みしていれば見た目にはしたない。顔が少し赤らんでいるのを感じながら、気まづくなった俺はその場でゆっくりと立ち上がった。

「あれ？ うさぎ飛びもう終わり？」

「あ、ああ。とりあえず今日はやめとく……」

「どうしたの？」

「なんでもない」

顔を覗き込んで聞いてくるシヤスティから目を逸らし、俺はあさっての方向を見る。何気なく向けた視線の先に古めかしい肖像画を見つけた俺は、話題を切り替えようと彼女に聞いてみた。

「なあ、あんな絵飾ってあったっけ」

見つめる視線の先を見た幼馴染は、呆れた様子で答えた。

「あんた気付かなかったの？ あれは秘蔵みたいなんだけど、遂に公開することを王妃様が決めたらしいわよ。2週間位前に入れ替え作業してるの見たし。ほら、名前見てみなさいよ」

「ん？」

彼女に促され、俺は絵画の下にあるネームプレートを見てみる。

そこに書かれていた名前を見た瞬間、俺は驚愕し言葉を失った。『レオン・ガフ・ブリタニア』

ライオンハートだ……。

肖像画とネームプレートを交互に何度も見返す。これが……この人が、あの獅子心王なんだ。

隣に立つシャステイのため息が聞こえる。しかしそんなことも気にならないくらい、俺はこの絵に見入っていた。

豊かに蓄えられた髭は長く、精悍な顔つきで、その目付きは鋭いがどこか優しさを滲ませる表情をしている。宝石などが散りばめられた豪華な金の王冠をかぶり、白銀の甲冑を身に着け、黒で縁取りされた真紅のマントを纏っている。そして剣を鞘に入れた状態で地面に立て、柄に手を添えた格好で描かれていた。

童話でしか見たことのない獅子心王の絵。しかし今すぐ目の前に、生前のライオンハートの実像が広がっている。

どう言葉で表したらよいのか分からないほど、俺は感動を覚えた。

「絵が残ってたんだな……」

「そうみたいね。よかったじゃない、絵本の絵でしか見たことない憧れの人を拝むことが出来て」

「……そうだな」

肖像画を見つめたまま呟いた。すると突然、シャステイは時計を確認すると何かを思い出したようにハッとして声を上げる。

「ヤバっ！ あたし用事あるの忘れてたわ、ごめん、もう行くね。バイバイ！」

「え？ あ……」

……行ってしまった。まあ、引き止めた所で他に話があったわけでもないけど。

俺が顔を向ける頃、彼女は既に15mも向こうを走っていた。

相変わらず足速いな。まともに勝負したら、俺の方が遅いんじゃないかってくらい、昔からあいつは足が速かった。……あいつメイド、だよな？

彼女の背中を見つめながらふとそんなことを考えていると、不意に背後から声が掛かる。

「こんな所にいらっしゃったのですか、ヴィクトル様」

……またも聞き慣れた女性の声。俺は几帳面でしっかりしていそうな声の主に振り返ろうと、ゆっくりと身体をそちらへ向けた。すると顔の位置がすぐ目の前にあり、あまりの驚きで後ろへ仰け反る。

「うおっ！」

また一人現れた……。

口角を少し上げて笑顔で俺を見つめる女性。してやったりと思っているのだろうか、いつにも増して楽しそうな表情をしている。

この女性は現ブリタニア国王の娘である、リリアーナ姫の付き人兼教育係のルチアさん。まあ言うところの侍女という奴だ。

俺より少し年上で、そのせいかいつも子供扱いしてくる。悪戯が好きでよく吹っかけられるのだが、無邪気な子供のような笑顔を見るとつい許してしまう、そんな女性だ。

普段はあまり表情を崩さないが、時折見せる笑顔が可愛い。姫様の付き人ともあって、頭脳明晰で容姿端麗。非の打ちどころがない程よく出来た人だ……。たまに度を越した悪戯をするのが玉に瑕だが……。

と言うかこの人が来たと言うことは……？

「姫様がお呼びですよ？」

きた。悪夢のお使いクエスト。今度はいったい何やらせる気だよ。……がしかし、俺にはやらねばならないことがある。

やめるつもりだったが……。言い訳には使えそうだ。

「いや〜タイミングが悪い。俺にはまだ日課が残って——」

「絶対遵守です」

笑顔を崩さずに低めの声でそう言われた俺の思考が止まった。それ以上の言葉は発せられていないが、その笑顔が十分すぎるほどに無言の圧力をかけてくる。

ガックリと肩を落とすと、まるで猫のように、ルチアさんに首根っこを掴まれてそのまま連行される俺……。なんてなさけない——。

そうして連れて来られたのはリリアーナ姫専用の謁見の間。

変わったことにこの王国には、王と王妃、そして王女と王子にそれぞれの謁見の間が設けられている。

また変わったことに、俺は王と王妃の謁見の間より、このリリアーナ姫の謁見の間への出入が格段に多いのだ。

相変わらず頭がクラクラしそうな程のバラの香りに包まれた部屋の中央奥に、俺を呼び出した当人が豪華な玉座に偉そうに足を組んで座っていた。

首根っこを掴んでいたルチアさんは手を離すと、そのままスタスタと姫の方へと歩いていく。

俺は姿勢を正し、改めて部屋を見た。

白を基調とした内装の部屋の入口には獅子の彫像が置かれている。王と王妃の謁見の間にも置かれているのだが、姫様の方はどこか可愛らしくデフォルメされた、まるでぬいぐるみのような獅子だった。そして入口から姫の元へは高そうな絨毯を踏んで歩く。幾何学模様で織られた赤い高級絨毯は、その上を歩くだけで気が引き締まる思いがした。

そうして玉座へと続く小階段の手前まで来ると跪いて頭を下げる。

「ヴィクトル・ノーティス、ただ今参りました」

「ねえ……その破廉恥な格好はなに？」

「えっ？」

玉座の肘掛に肘を付き、姫は頬杖しながら俺に言った。改めて自分の格好を見てみて、そして気付いた。

しまった！ 回廊に鎧忘れてきた……。

ルチアさんが強引に連れていくもんだから、うっかりして置いてきたことすら忘れちゃった。

玉座の隣で一步下がり、腰の辺りで手を組み合わせて立っているルチアさんをチラリと見る。彼女は悪戯に微笑んで、声を出して笑うのを我慢しているようだ。

……またやられた……。項垂れる俺に姫は続けた。

「まあいいわ。それで、あなたを呼び出した訳なんだけど――」

はいはい、またどうせお使いだろ？ 頼むから簡単なものにしてくれよ？ 先月なんか大変すぎて泣きそうになったんだからな。なんと黒狼のヘアブラシが欲しいとか言い出して……。さっきルチアさんが言っていたが、姫の言葉は“絶対遵守”。だから逆らうことが出来ない。身分的にも当たり前なのだが。

しかも買ってこい、ではなく作ってこいと命令されたもんだから、俺を殺そうと画策してるんじゃないかと疑っちまったよ。

黒狼とは「ヴラドウルガルム」と言う名の巨大な狼のこと。体長は優に10mを超える。その力も半端ではなく、副団長程度のレベルでは到底倒すことなど不可能だ。

よって俺は倒すことを諦めた。が、とりあえず走り回って探したおかげか、途中で遭遇したモブを倒しまくりレベルだけは上がったんだ。

しかし手ぶらで帰るわけにもいかず、滅多に出回らない黒狼の毛を求めてマーケットを覗いてみたところ……なんと運良く一つ分のブラシを作る程度の毛が売っていたのだ。値段は550万ガロ（Galio）。

副団長の給料半年分だ。他に金策がないわけではないが、それでも大金には変わりない。俺は仕方なく貯金を崩し、泣く泣くそれを買って帰った。

……どうか神様お願いします、あの時のような無理難題を押し付けられませんように……。

「——という訳なのよ。いいかしら？」

「えっ？ あ、はい」

「そう、なら頼んだわ」

そう言うとは姫は立ち上がり、謁見の間を出て行った。

俺が思い返している内に、どうやら話は終わってしまったらしい。そして、内容も聞かずに返事をしてしまった。

「う、うわぁーっ！！ なにやってんだ俺は！」

頭を抱えてうずくまる俺に近付いてくる気配。顔を上げるとそこにはルチアさんが立っていた。

「ヴィクトル様、どうかなさいましたか？」

「え？ あーいや……その」

「まさか、姫様のお話を聞いていなかった、とか？」

うっ！？ またプレッシャーを感じる。笑顔でとんでもない圧力を掛けられる人だな、この人は。

正直俺は彼女も苦手だ。……素直に謝ろう。

「すみません」

「今日はやけに素直ですね。いいでしょう、私が教えて差し上げます。姫様はケーキが食べたいので、街へ行って買ってきて欲しい、との事です」

「ケーキ？ よかったー、そんなことで」

「ふふっ、よろしく願いますね」

そう言って丁寧なお辞儀をすると、ルチアさんは姫が出ていった扉から同じく部屋を後にする。

俺はその背中を見送った後、安堵のため息を吐いた。

まあ、ケーキならいいか。……にしても姫様は何故俺ばかり雑用に使うんだ？ 他に暇そうな騎士ならいくらでもいるだろう。まあ、俺も暇じゃないかと言われれば否定は出来ないが……。

「って、こんなことしてる場合じゃなかった」

急いで回廊に置き去りにした装備まで戻らなければ。

もしあんなところが団長の目にも触れれば、また俺は小一時間ほどの説教を受けることになる。その前になんとしてでも再装備しな

ければ……。

立ち上がると獅子像を横目に部屋の扉を開けて出る。そしてそのまま廊下を走った。

たしか場所は、獅子心王の肖像画が近かったような気がする。しかし、レーザーチュニックスにレーザーパンツといった貧相な格好で廊下を全力疾走する俺の姿は、貴族たちの好奇な視線の的になっていた。……情けないが仕方ない。

そしてついに、目の前の角を曲がれば装備品を置いた場所、という所まで走ってきた。勢いそのままに俺は角を曲がる。その視線の先には綺麗に纏められた甲冑が――。

「っ!？ げっ」

同時に目に飛び込んできたのは、俺が今最も見たくない人物だった。案の定、鎧を置いてどこかへ行っていた事が団長にばれてしまったのだ。腕を組んで装備一式を見下ろしている。

俺は咄嗟にうさぎ跳びのフォームになると、ジャンプしながら団長に近付いた。

「あれ？ 団長、一体どうしたんですか？」

「どうしたではない。貴様、これは何だ？」

「これって……？ 見れば分かるでしょ、俺の装備品ですよ」

「……何故脱いでいる」

「そんなの重いからに――」

「馬鹿者!!」

急な怒鳴り声に多少ビクついた俺に、再び団長の説教が飛ぶ。

「鎧を着たままでなければ訓練にならんだろうが!」

「なんで俺だけ――」

「口答えをするな！ ……貴様は本当に留守番だ。私が帰ってくるまでここでうさぎ跳びでもしている！ コレがお前の日課だ」

そう言っただけに雑に投げられ渡されたのは1枚の紙切れだった。俺はそれを手に取り内容を確認する。

なにになに……腕立て3000回、腹筋3000回、背筋3000回、スクワット3000回、回廊うさぎ跳び250週、城外ランニング100週……以上。

「ノルマだからな、一日でもサボってみろ！ 副団長から降格させるぞ」

それだけ言い残すと団長は、ふんつと鼻を鳴らして俺の前から立ち去った。珍しく小一時間くらいの説教もないことに少し安心したのも束の間。

……なんだこれ……マジでこれ一日でやるのか？ いくら体力が上がったからって、これはさすがにキツイんじゃないか？ あのクソじじい一体なに考えてやがる！

「ちっ！ 遠征にでもなんにでも行っただけで死んでこい！！ 8回くらい死んでこい！ ……ったく」

イラついた俺は罵詈雑言を口から吐き出した。……だが、ちっともスッキリしない。

あーイラつく。

「あ、そうだ。そういや、姫のケーキ買わなきゃなんねえんだった……」

用事を思い出した俺は急いで装備を身に着ける。鎧を装着すると剣を腰のベルトに2本差す。兜は脇に抱えて持ち、そのまま城を後にした。

「姫は一体なにが好きなんだ？ ……まあ、適当でいいか」

俺は息抜きも兼ねてのスイーツ選びを楽しむことにし、夕方の街へと1人くり出した。このイライラとストレスの発散になることを願って……。

団長

翌日の朝。

何やら外が騒がしく、騒音により目が覚めた俺は寮の部屋から外を覗いてみる。すると拓けた土地に設けられた訓練場に、隊列を作って並ぶ大隊が見えた。

銀色の騎士鎧が陽に照らされ、その光を反射して眩いばかりに輝いている。騎士たちが見つめるその先には騎士団長が立っていた。

……そうか。演習を兼ねた遠征の出発日は今日だったのか。

脳裏に、昨日団長から言われた言葉が木霊する。『貴様は留守番だ。うさぎ跳びでもしてろ』

「……はあー、まあいいか」

深いため息をついた俺は、何時だろうと思い時計を確認する。他の騎士達よりも多少広めに作ってある部屋の隅。あってもなくても特に変わらない机の上に置かれた、ブリタニア王国の獅子紋入りのシンプルな小型置時計。

ちなみになんと古臭く面倒臭いことに、ぜんまい式だ。1週間に1度は巻き直さなければならぬ。その時計の針は8時20分を指していた。

普段ならとうの昔に起きてあの隊列の一番前、騎士たちに背を向けて団長の目の前に立っているはずなのだが、どうせ行っても俺は留守番。行くだけ時間の無駄だし、お呼びでないだろう。

諦念から再びベッドへ横になる。

目を閉じるとまたすぐにでも寝られそうだ。いつそこのまま寝て

過ごすか？ 滅多に出来ない経験だしな。

「なんか……本当に……眠たく……」

もう少しで寝に入れる。そう思った俺の意識を眠気ごと吹っ飛ばしたのは、団長の馬鹿でかい激声だった。

『これから諸君らは私と共に遠征に向かってもらう！ 最低でも1週間は戻ってこれないだろう。騎士見習いの諸君には厳しい訓練になることと思う。だがしかし、これも実戦経験を積む良い機会だ。各々の更なるスキルアップと昇級を目指し、訓練に勤しんでもらいたい——』

おーおー、朝っぱらから堅苦しい挨拶しやがって。出立する前から肩がこりそうだな。

頭の後ろで手を組み仰向けに寝転がると、外から聞こえる団長の声に耳を傾ける。

『今回の遠征地のモブはあまり強くはない。だがしかし、万が一命の危機に瀕するようなことがあれば、逃走も選択肢の中に入れておけ。命あってのものだからな——』

そうだ。そう言えばあの時の見習いに言った言葉。あれは団長からの受け売りだった。たしか……。

『守りたいもの、自分が抱く夢、信念。それらがあるのならば、逃げることを恐れるな。逃げる恥を受け入れる事、それもまた勇気だ——』

「守りたいもの、自分が抱く夢、信念。それらがあるのならば、逃げることを恐れるな。逃げる恥を受け入れる事、それもまた勇気だ」

だったよな？ ……って、団長とまるつきり被ったじゃねえか！
気持ち悪っ！

重なり合った2つの声が俺の耳に響いた。と同時に騎士たちの返事をする声が訓練場に響き渡る。そして大隊は移動を始めた。

……そう言えば、今回の遠征地はどこなんだ？ 話に出てきたか……？ また俺は聞き逃したのかもしれない。

まあでも、モブが弱いんじゃないかと本当に見習いの訓練にしかならなさそうだな。死の危険もほばないと言っているだろう。

団長を先頭に、騎士の大隊は隊列を組んだまま行進を始める。一体何人の騎士が共に行くのだろうか。ざっと見ても3000人はいそうな気がする。その大半は見習い騎士だが。

……1週間か。結構長いな。

本来ならばそこにいるはずの、騎士の軍団を窓から眺めしばらくの間見送った。やがてその全てが城外へと消えたのを確認すると、俺は特にすることもないが、とりあえず着替えることにする。

部屋に備え付けのクローゼットを開けると、俺は中から黒のインナーシャツとズボンを出す。これは普段、基礎トレーニングをする時に着用するもので、念のために着替えておこうと思う。

着替えをチャッチャと済ませた俺は、脱いだパジャマもそのままに部屋を出た。

「さーてと、どこに行くかなー」

これから1週間。あの口煩い団長がいなくなると、十二分に羽を休められそうな気がする。

……自室の前でそんなことを思っていると、寮内に住む下級騎士

から声が掛かった。

「あ、副団長、ようやくお目覚めですか」

「ん？ ああ。なんだ、お前は行かなかったのか？」

「ええ。私は王国の守備の方に回されましたので」

「なるほど」

納得して頷くと、騎士は俺に何かの紙を差し出した。

「なんだ、これは？」

「団長から、副団長に渡してくれと言われたので……どうしました？　すごく嫌そうな顔ですね」

渋い顔をする俺を、騎士は訝しがりながら首を傾げて見てくる。

……当たり前だろ。団長からの手紙？　きつとろくでもない事が書かれているに違いない。

俺は嫌々、騎士から団長の手紙を受け取ると、とりあえず礼を述べた。

「ありがとうな。確かに受け取ったよ」

そう言うと、騎士は頭を下げてそのまま立ち去った。俺は今手渡された手紙を一度見る。

きつと不幸の手紙だ。……あーあ、これが可愛い女の子からのラブレターだったら、どんなに嬉しいことだろうか。

そんな淡い思いも虚しく、手元にあるのは小汚いオッサンからの手紙という事実に泣きたくなってきた。

とりあえず歩き出し、どシンプルな手紙の封を破る。

きつと女の子なら、可愛いデザインの手紙を使うのだろうが……いや、団長がそんなものを使った日には1週間高熱にうなされる

だろうけど……。

手紙の袋が袋なら、中の手紙もまた同じ。出てきたのは何の変哲もないただの紙……ではなかった。入っていたのはチラシだ。

……どんだけ手抜きなんだ！ 俺如きに紙を使うのがもったいな
いってか！？ そうなのかクソじじい！

「完全になめられてるな……」

イライラもそこそこに、俺はその内容を確認しようと、不本意ながら折りたたまれたチラシを開いて内容を読んだ。

『私が帰ってくるまで、ノルマを1日でも怠るんじゃないぞ。お前の様子は逐一報告するように見張りを頼んでおいたからな。以上だ』

以上だ。……ってなにがだよ！ てか、こわっ！ やっぱ不幸の手紙じゃねえか。

それにしても見張りを頼んだって……誰にだ？ ……いや、それがバレたら見張りになんねえか。

「……ちくしょう。やっぱやるしかねえんじゃないかよ」

念のため、と思いつ替えておいて正解だったな。いちいち部屋に戻る手間が省けたぞ。

あれこれ考えている内に、気付けば俺は寮のエントランスまで歩いてきていた。

広々とした空間はとても明るく、観葉植物なんかも置かれていて配色にも気を配られており目にも優しい。

階段を下りながら手にした手紙をくっちゃくちゃに丸めると、受付の脇に置かれた紙専用ゴミ箱の中にポイツと投げ捨てた。

「見てろよ。ステータス上げてあつと言わせてやる！」

見返してやりたい気持ちと、今日遠征に行けなかったイライラが相まってか、多少やる気になっていた。まあ、前向きなのはいいことだな。

あーそう言えば、昨日買ったケーキ。ルチアさんちゃんと姫に渡してくれたかな。またこっそりつまんでんじゃないかと思うと、あの人に渡してよかったものかと少し心配になってくるが……。

まあでも、6個買ったから1つや2つ減ってることを、あの姫様が気付くわけないから別にいいか。

「……さてと、そろそろ行こう」

考え事もそこそこに、気持ちを新たに切り替え、団長からのクエスト『体力作り』を遂行するべくトレーニングルームへと向かう。そうしてこれからの1週間、俺の筋トレ三昧な日々が続くのだ――。

……それから1週間と3日が過ぎた。

団長が『私が帰ってくるまで――』と言っていたのを思い出した俺は、この3日間も1日のノルマを欠かさずに行った。するとどうだろう。この僅か1週間足らずであるにもかかわらず、俺のステータスは著しく上昇したのだ。

具体的には力が26、体力が32、敏捷が17も上がった。しかしレベルは変わらない……。

俺はこの日のノルマを終え、特にすることもない為、城の回廊をただひたすらにグルグルと周回する。そして丁度立ち止まった位置

は、あの獅子心王の肖像画の前だった。

見上げたレオンは威風堂々としていて、絵画であることを忘れるくらいのオーラが滲み出ているのを感じる。

「……くっそー、レベルが上がらなきゃライオンハートどころか、団長にすら近づけないだろうが！」

遅い、遅すぎる。まだ帰ってこないのかよ団長は！ 次の遠征地はどこだ！？ なんなら先回りしてもいいんだぞ？！

とは言ってみたところで、次の遠征地など知る由もなく、俺はただイライラを募らせるだけだった。

1週間と言っていた。団長がそう宣言したなら、必ずと言っていいほどその期間内で戻ってくる事が出来るはず。モブは弱いんじゃないなかったのか？ 強くてもさすがに団長の手を負えないのが出てくるとは思えないしな……。

「はあー、まあいいか。俺は1人でステータス上げに勤めますよ」
項垂れて諦めのため息を吐き、歩き出そうと身体を横に向けたところで、背後から聞き覚えのある声に呼び止められる。

「副団長殿ーっ！……！！」

かなりの大声だ。絵画を見ている貴族達がビックリして、みんな揃ってそちらへ視線を投げる。

俺も釣られて回廊に響く声の主に向き直ると、なるほど。以前こでくたばってたあの騎士見習いだった。安っぽいプレートメイルをガシャガシャと音を鳴らしながら、息を切らせてこちらへ走り寄ってくる。

かなり切迫した状況だというのは見て取れたが……。

「そんなに急いでどうした？　　というかお前は遠征に行ったんじゃないのか？」

「はぁー、はぁー、はぁー、は、い……はぁー、はぁー」

「なんだ、やっと戻ってきたのか」

見習いが戻ってきたのを見て、ようやく団長が遠征から帰還したらしいことを悟った俺は、ようやくトレーニング地獄から開放されることに安堵した。

だが見習いの様子がどうもおかしい。

「ん？　　どうした？」

「はぁー、はぁー……だ、団長が……うつ、ゲホッ、ゴホッ、ガハッ……！」

「おいおい、少し落ち着いてから話せよ。ほら、深呼吸だ、スー、ハー」

深呼吸を促すと、見習いは俺に倣って同じように深く呼吸をした。

「どうだ？　　落ち着いたか？」

「は、はい。申し訳ありませんでした」

「それで、一体何があった？」

「それが……だ、団長が……お亡くなりになりました」

「……はっ？」

あまりの突飛な報告に俺は愕然とした。そのまましばらくの間、だらしなく口を開けたまま固まっていたが、ハッとして目の前の騎士を見る。その表情は暗く、悔しそうに歯を食いしばっては身体を震わせている。

……おいおい、それはなんの冗談だ？ あの団長が死んだ？ そんな訳あるか。……まさか団長に頼まれて一芝居打っているとか？
そして俺を驚かそうって魂胆かもしれない。
いや、団長がそんなキャラじゃないことは重々承知しているが……
まさか――。

「本当に、死んだのか？ あの団長が」

そう問うと、見習い騎士は静かに頷きそして言った。

「はい。騎士団長だけではありません……。さ、3000名で編成された今回の隊のうち、残ったのは僅かに52名です。他の騎士たちはみなさん戦死されました」

「ちょ、ちよつとまで。確かここを出る前に団長は“モブは弱い”
と言っていたな。なのに大隊が壊滅状態ってのはどういうことだよ？
いったい今回の遠征地はどこだったんだよ」

「く、クローネの瓦礫の荒野です」

「クローネ？」

……おかしい。クローネと言えば、150年ほど前に黒竜ファフニールの襲来により消滅した大都市の跡地だ。今は広大な荒野が広がり、草木もほぼ生えぬ都市の残骸を残すだけの大地となっている。
しかも団長が言っていた通り、あの荒野にはそこまで強力なモンスターは出てこない。俺も何度か行ったことがあるからそれは間違いない筈。では一体何故……。

すると見習いはカチカチと歯を鳴らし、身体を戦慄わななかせながら口を開いた。

「ぶ、ブラックドラゴンです」

「なにっ!？」

ブラック、ドラゴン……?」

俺は驚愕した。クローネに生息するはずのない個体。その姿を目標撃した者もほとんどいないほどのレアモブだ。しかもレッドドラゴン系統の最強に位置する亜種。遭遇すればまず間違いなく、今の俺では太刀打ちできない。

……団長が殺られた? あのだん長が……ん?

一つ気になったことがあり、それを騎士に訊ねてみた。

「おい、団長はインペリアルを連れて行かなかったのか?」

「いえ、インペリアルの方は3名いらっしゃいました」

「たった3人?!」

——インペリアルとは、中級騎士からクラスチェンジすることによってなれる上位のジョブだ。位としては副団長と上級騎士の間に位置している。

話に聞くとところによるとその訓練は過酷を極め、特に守りに関してのエキスパートとなる。訓練自体がトップシークレットな為、その様子を窺い知る機会などありはしないが、元インペリアルの知人の話では相当厳しいらしい。その主な任務は要人の護衛などだ。

しかし何故だ。騎士団長になるとインペリアルを最大10名まで引き連れていく事が出来る筈。……まさかこの守備の為に置いていったのか? いつも油断は禁物だ、と口煩く言っていた癖に……軽率すぎるぜ、団長……。

団長の浅はかな行動により生じた結果に、苦渋の表情を浮かべる俺に対して、見習いは恐る恐るといった感じで訊ねてきた。

「あの、副団長殿」

「ん？」

「ブラックドラゴンとは……黒竜のことですか？」

「は？ お前はただの黒い竜と黒竜の違いも知らないのか？」

「ハッ！ 申し訳ありません！」

そう言って姿勢を正す騎士に、俺は語気を荒げて言った。

「馬鹿野郎！！ 勉強が足りんぞ！」

「ハッ！ ぜひ、ご教授願えればと思います！」

「馬鹿野郎！ 自分で調べないと身にならないだろうが！ ……そういうお前には、王立図書館で調べてくることをオススメする」

「ハッ！ 申し訳ありませんでした。直ちに行って参ります！」

ハキハキした調子でそう言うと、見習いは敬礼をして走り去っていく。

……ちなみに黒竜はあの伝説のドラゴン、ファフニールの事だ。レッドドラゴンの亜種であるブラックドラゴンなどとは比べ物にならない大きさ、そして強さらしい。

体長は80mを優に超えるそうだ。クローネの荒野を見ればその力の凄さが分かることだろう。もし今回現れたのがファフニールだったならば、3000人などそのブレスの一撃で焼失する。まあ、封印されているそうだから現れることはないが。

「——と言うわけだ」

見習いの直向ひたむきな背中に向かってそう言うと、不意に耳元で声があった。

「なーにが、と言うわけだ、よ」
「ん？ うわぁ！」

顔を横に向けるとシャスティの顔がすぐそこにあり、驚きのあまり俺は仰け反りその場で尻餅をついた。

「びっくりさせるなよ」

「あんたが勝手に驚いたんでしょ。それより、なにかあったの？ 騒がしいようだけど」

「……団長が、死んだらしい」

「えっ！？ うそ……」

彼女は信じられないと言った表情で、しばしの間瞬きもせず硬直していた。

俺だって信じられないさ。あんなに強かった団長が死ぬなんて。いまだ実感が湧かない。

2人して暗い顔で俯く。

「そう。……団長さんね、あんたの監視をあたしに頼んだんだ」

「え、見張りってお前だったのか！？ 騎士たちにおかしなことを報告されやしないかと、怯えながらトレーニングしてたのによ……用心して損した……」

「手紙のやり取りしていてね……あいつはやれば出来る奴だからって……」

すると突然シャスティの声が震え出す。見ると目には涙が浮かんでいた。そして話を続ける。

「団長さんはね、あんたと同じなんだよ……。だから、頑張っ、ほしかったんだ……。だから、厳しく……うう……」

とうとうシャスティは声を上げて泣き出した。

……おいおい、貴族達が見てるだろ。なんか俺が泣かしたみたい
に思われるじゃないか。

うろたえる俺を余所に、彼女は涙を零しながら俺を見つめる。

「うっ」

俺はこいつの涙が昔から嫌いだ。見ていだけで罪悪感に苛さいまれ
る。

どうしていいのかわからず、俺はただシャスティを見つめ返した。
すると彼女は急に方向を変えて俺に背を向けると、そのまま走り去
っていく。

しばらくして曲がり角の前で立ち止まると、振り返りざまに言っ
た。

「頑張つてよ！！ ヴィクトルー！！！！」

回廊に大きな声が響く。そして彼女は角を曲がり、その姿は俺の
前から完全に消えた。

「はあー？ いったい何なんだあいつは……。泣いたと思ったら急
に走り出して、挙句頑張れだ？ しかも俺と団長が一緒？ 全然似
てもねえよ」

言ってる意味が分からず、頭を掻きながらその場でただ立ち尽く
す。

……なんだかんだで、団長は色々な人から人気があった。親父よ
り親父らしいと言う者も少なくない。騎士団寮には父親がいない者
も沢山いる。そういった者達の父親代わりの所もあっただろう…

…。

俺はふと壁を見上げる。そこには俺の憧れと夢。ライオンハートが堂々と前を見つめて立っていた。

「団長……」

無意識に声が漏れる。……俺にとって団長は……なんだったんだろう。

考えても結局答えは出ず、時間はまだ早い、今日はもう寮に帰って休むことにした――。

姫からの勅命（クエスト）？

団長の死の報せを聞いてから3日後。

荒野の安全が確認されたのか、団長の遺体がクローネから騎士団寮へと運び込まれた。団長だけではなく、インペリアルから上級騎士までは、戦場で死んだ時遺体が優先的に本国まで送られることになっている。そのため、計150名がここへ帰ってきた。

他の騎士たちは……残念ながら後回しだ。

死と隣り合わせと言うこともあり、俺も幾度となくその危機に直面してきた。

友人の死を目の当たりにした事もある。さっきまで威勢のいい声を張り上げていたと思ったら、気付いた時には大地に横たわっていたなんてことはざらだ。

見習いの頃は吐き気を催したものが、やはり人は慣れていくんだろう。人の死というものに。それが身近になれば、なお更だ。

副団長であるが故のけじめとして、俺は団長の遺体を確認した……が、ひどい有様だった。

——生き残った見習い達の話によると、1週間、クローネは特に変わった様子はなかったらしい。

いつも通りの演習と、周辺に生息するモブを狩る。本当にそれだけだった、それだけの筈だった。

無事1週間を終え、王国に帰還しようと背中を向けた瞬間、騎士達の頭上、遙か上空から竜の咆哮が聞こえたそうだ。

空から地上へと降りてきたのはブラックドラゴンだった。降り立ちざまに竜はブレスを吐いて大隊の4分の1ほどを吹っ飛ばした。

あまりに突然のことで、その場にいた見習いと下級騎士はうろたえる。

団長は相手がブラックドラゴンと言うこともあり、早々に撤退命令を下した。しかし戦意を喪失し立ち尽くす者達が多く、そこへドラゴンが襲いかかる。

長い尾で騎士を吹き飛ばし、空へ舞い上がった者達をその鋭い鉤爪で切り裂く。そしてブレスの第2波。4分の3いた騎士は500人ほどになり、全滅を危惧した団長は凹になることを決めた。

3名のインペリアルと上級騎士147名で隊を組み、戦闘が始まる。

団長は最前列でインペリアルを盾に一步前へ出た。しかし、逃げる見習い達の背中に向けてブラックドラゴンはまたしてもブレスを吐く。

団長は注意を引ききれなかったのだ。火球は大地を抉り、爆風と火炎により見習いの大半が死亡。安全地帯まで逃げきった者達は、最後になるであろう戦いをその目に焼き付ける為、岩場の影から戦闘を見守ったらしい。

インペリアルの盾で火球によるダメージは軽減出来るものの、時間が長引けば団長達が不利なのは目に見えている。それほどまでにブラックドラゴンのHPは多い。

そして団長達の死と言う名の敗北により戦闘は終わりを迎えた。その場から飛び去るブラックドラゴン。それを確認したあの騎士見習いが、あの日、俺に報告する為に早馬を駆って伝えに来てくれたと言うわけだ。

後日――。

今回の遠征により死亡した、団長を始めとした騎士達の葬儀が営まれた。俺ももちろん参列した。沢山の人々が、皆を弔う為に集まってくれた。

その中に団長の奥さんと娘さんもいたが……俺は何も言えなかった。娘さんを抱いて泣き崩れる奥さんを、ただ遠めに見つめていただけ。

自分があの場に、あの戦闘にいたならば……少しは戦局が変わったのだろうか。……そんなはずはないと心のどこかで思いながら、歯を食いしばり自分の無力さを噛み締める。

葬儀が終わった後、俺は国立公園へと足を運んだ。

葬儀が始まる前、遠征の生き残りの騎士から手紙を受け取っていたのだ。団長からの手紙と言われ手渡されたその紙を持ち、俺は今ベンチに座っている。

目の前には大きな噴水が見える。神々を模った立派な彫刻から、延々と水が噴き上がっている。

俺は手元の手紙へ視線を落とした。なんとなくだが内容は想像がつく。きっと団長の引継ぎの話だろう。

「俺は……」

読むべきなのだろうが中を開く自信がない。

実力であるわけではない騎士団長。俺は……また“運”でクラスチェンジするのか――。

そう、あれはちょうど2年半前だ。

その頃の俺は副団長候補だった。副団長候補はその名の通り、次

の副団長となるに相応しい実力を持った者に与えられる役職で、上級騎士から最大3名まで選出される。その時は俺と、もう1人別の騎士の計2名が選ばれた。

そいつは貴族で爵位持ちのエリートだった。しかしそれを鼻にかけることもなく、誰とでも分け隔てなく接し、面倒見も良くて団員達からの信頼も厚い。俺とは真逆の騎士だった。

だが共に任務をこなす内、俺はそいつと仲良くなり、互いに信頼し合える存在となっていた。

そんな時だ。団長から緊急クエストが俺たちに言い渡されたのは……。

互いに別々の地へ隊を率いて遠征に向かい、そこで成果をあげてくること。

翌週、俺たちはそれぞれ指定された遠征地へと向かった。俺は順次クエスト内容をクリアしていき、特に何事もなく王国へ帰ることが出来た。

……しかしあいつは……遠征地で、死んだ。出てきたモブが悪かった。現れた魔獣は黒狼ヴラドウルガム。

団長クラスでインペリアル付きでようやく倒せるレベルのモブ。俺たちのレベルでは倒すことは不可能だった。

遺体すら国へと戻ることなく逝った親友の死。それと同時に任命された、副団長という無慈悲なまでの現実。

俺の心の中で葛藤が生まれた。夢の為にはクラスを上げなければならぬ。しかし、親友と呼べる人間を犠牲にしてまで俺がなっていないものなのか……。

悩んだ末、そんな心の内を団長に相談した。だが団長から返ってきた言葉は……残酷なものだった。

『あいつは優秀だったが、運がなかった。戦場は何が起こるか分か

らん。死は仕方のないことだ。それを承知で騎士になったんだろう。あいつのことは諦めろ。お前が副団長だ』と。

その日から俺は副団長の座に就いた。上級騎士以下を束ねる重要な役どころ。だがそれと同時に、団長への不信感が少し芽生え、その日から俺は団長へ反抗的な態度を取るようになった。

……仕方がないと、運がなかったと……心無い一言で片付ける団長が信じられなくなったんだ。もっと他の言葉はなかったのかと……そう思った。

「ふう」

小さくため息を吐いた。小さいが、どこか沈み込むような重みのある息。と同時に空を眺める。見上げた空は広く、鳥が飛び、雲が流れていく。

自然は自由でいいな。悩みなんて、どこにもないのかもしれない。俺は再び手紙を見た。

なぜか少しだけ古ぼけて見える手紙の封印には、団長の勲章である盾と剣、それと十字を象った封蝋が押されている。

遠征の日に渡されたような陳腐なものではない、正式な手紙。意味の重さがまるで違う……。

一度目を閉じ深く息を吸い込む。ゆっくりと吐き出して目を開けた俺は、意を決して封を破った。

中から出てきた二つ折りの紙は、見るからに高そうな真っ白な紙が使われている。

気を引き締めて、俺は団長からの最後の言葉を、その内容を読んだ。

——副団長ヴィクトル・ノーティスへ——

この手紙を読んでいるということは、私は恐らくこの世にはいないのだろうな。

それは当然のことだ。この手紙は、いつ死んでもいいように、お前に宛てて書き、戦場に行く時には必ず携帯している物なのだから。

昔のことを今更掘り返すのもなんだが。副団長になる時に、お前はかけがえない友を失った。あの時の私には、あれが精一杯の答えだった。今思えば、もっと他にかけてやれる言葉があったかもしれない。すまなかったな。

だがヴィクトル、忘れるな。戦場はかくも無慈悲なものだ。相手がモンスターであれ人であれ、殺らねば殺られるのが戦いだ。割り切ることも大事なのだ。そうしなければ前へは進めない。

私も幾度となく経験してきた。父親の死から友の死、そして部下の死を。辛いのはお前だけじゃない。

それとお前には夢があるそうだな。幼き頃よりの夢、か。それを知ってから、随分とお前には厳しくしてしまった。それもすまなかったと思っっている。

公言してはいないが、私にも“夢”があったのだ。だが、私には叶わぬものなのかもしれない。

だからお前には頑張ってもらいたかった。私と同じ“夢”を持つお前に。

ヴィクトル、お前ならなれるさ。伝説の称号ライオンハートに。だからこれからも、夢への努力を怠らずに憧れをその胸に抱け。称

号を手にするその日まで、その歩みを止めるな。

偉そうなことを言ったが、これが最後だ。

お前にライオンハートの夢を託して……。さらばだ、ヴィクトル。

——ロザリア騎士団長　オルバ・ウェイン——

手紙を読み終えた俺は、気付けば涙を流していた。頬を伝う温い水。落ちて手紙を濡らしていく。

友が死んだ時ですら出なかった涙。長らく忘れていた胸が熱くなる感覚を思い出した。

「団長が……俺と同じ夢を……？」

あの時のシャスティの言葉“あんたと同じ”その意味がようやく分かった。

俺は団長に反抗的な態度ばかりとっていた。その厳しさの意味も知らずに……。団長の方がよっぽど辛かっただろう。父を失い、友を失い……。大切な部下も失って。

自分の未熟さに今更ながら気付いた。どれだけ小さな人間だったのかと。

周りに聞かれぬよう、俺は声を押し殺して泣いた。喉で止まる嗚咽は鼻から抜ける。声を我慢しているせいで鼻が痛い。目からは止め処なく涙が溢れ、瞳は乾くことを知らない——。

やがて落ち着きを取り戻した俺は空を仰ぎ見た。再び見上げた空は、先程とは違って見える。空はさらに澄み渡り鮮明に見え、鳥た

ちの囁ささやりはより自然に聞こえる。
まるで世界が違う。何かが俺の中で吹っ切れたようだった。

だが、本当に俺でいいのだろうか。そんな思いが未だ心の奥底で燻くすぶっている。……団長に認められて、騎士団長に昇級したかったな。いと思う。ライオンハートが夢ならば、団長は俺の憧れだったんじゃないかと。

視線を空から噴水へと移したその時、背後から突然声が聞こえた。声の主は分かっている、ルチアさんだ。だが俺は振り返らなかった。すると彼女は隣に静かに腰掛けて言った。

「ここにいらしたんですか……」

「ええ」

「私が来た意味は、ご存知ですよね」

「姫様、ですか？」

「はい。騎士団長に明日15…00、謁見の間へ来るように、との伝言を預かって参りました」

騎士団長、か。俺はもう正式にロザリア騎士団の団長なんだな。改めて自分の使命と責任の重さで、押しつぶされそうな不安感に苛まれる。しかしそんな俺を余所に、ルチアさんは話を続けた。

「私が言うのもなんですが、あなたは団長の器を既に持っていると思いますよ。もっと自信を持ったらどうですか？ そんな情けない顔で、明日、姫様に会うおつもりですか？」

「俺には、悲しむ時間さえ許されないんですか？」

問い返す俺に彼女は即答した。

「そうですね。……悲しむ暇があったら、少しでも夢への努力をし

たらどうですか？ オルバ様なら、そう仰ると思いますが」

「ルチアさん……珍しく、厳しいですね」

「ふふっ、そうですか？」

彼女へ視線を移すと、そこにはいつもの無邪気な笑顔があった。

……その通りだ。団長ならそう言うであろう事は俺にも分かっている。悲しんでる暇なんかない。少なくとも団長は、俺たちの前で悲しい顔をした事がない。それは薄情なんかじゃなくて、前に進む為に感情を押し殺していただけなんだ。

そうだ……俺が、団長の夢も背負ってやる。そして、絶対に叶える。ライオンハートの夢を。

「まともな顔つきになってきましたね。それでは、私はこの辺で失礼します」

そう言ってルチアさんはベンチから立ち上がり背を向けた。釣られて立ち上がると、彼女の背中に声をかける。

「わざわざそれを言う為にここへ？」

すると背を向けたままの彼女は答えた。

「言伝いこひでのついでです。……あなたに、みっともない顔で姫様に会って欲しくなかったの」

この人なりの気遣いなんだな。そう思い礼を述べる。

「……そっか。ありがとう、ルチアさん」

「ヴィクトル……。また明日、謁見の間でお会いしましょう。では」

ルチアさんは振り返ることなく、そのまま城の方へと歩き去った。俺は手紙に視線を落とし、涙で少し濡れた手紙を封筒へ戻す。

そのまましばらくの間、その場に立ち尽くしたまま物思いに耽る。そして今一度空を仰ぎ、決意を新たに寮へと帰った。

――翌日。

俺は昨日ルチアさんに言われた通り、リリアーナ姫の謁見の間へと向かった。騎士団長になると国から支給される、最高級の鎧を身に纏って。これを着ているだけで気が引き締まる思いがした。

寮から歩き、姫の謁見の間へと到着した俺は、ゆっくりとその扉を開ける。

すると玉座には不機嫌そうに頬杖をついてこちらを見つめる姫の姿があった。右斜め後ろには、ルチアさんがニコニコしながら立っている。

玉座手前の小階段下まで歩いていくと、毎度のことのように膝き頭を下げた。すると姫は小さくため息をついて言う。

「ようやく来たわね……はあ」

「姫様、何か御用でしょうか？」

本当なら敬語なんか使いたくはないが、立場上、身分上仕方がないから使う。

「用がなかったらいちいち呼ばないわよ」

……まあその通りだが。なんでいつもこの人はツンケンしてるんだ？

「まあいいわ。今日来てもらったのは他でもない、あなたに指令を

与えるためよ」

「またケーキ、ですか？」

俺は少し呆れ顔で姫へ問い返すと、姫は少し顔を赤くして答えた。

「なっ?! そんなわけないでしょ! それは……ま、また今度よ!」

“また”と言うことは近々再びお使いクエストが発生するのか……。なんだか憂鬱だな。

身振り手振りを交え、ああでもないこうでもないと言い訳する姫に、小さく息を吐き俺は訊ねた。

「それで、指令とは何です？」

「オホン! よくぞ聞いてくれたわね。騎士団長ヴィクトル」

「あ……はい」

名を呼ばれた俺はとりあえず返事をする。

すると、ビシッと人差し指を俺に向けた姫は指令内容を口にした。

「あなたに、ファフニール討伐を命じます」

「……………は？」

今、なんて言った? 俺の聞き間違いじゃなかったら、確かこう言ったと思う。“ファフニールを討伐”

……はは、そんなまさか、な。

「あの、今なんと？」

聞き間違いだと信じたくて、今一度姫に聞き返してみた。

「あら、聞こえなかったのかしら。ファフニールを討伐しろと言ったのよ」

やっぱり聞き間違いじゃなかったー!!

一体なに考えてんだこいつ……って、ああこんなことは口に出して言えないが。黒竜を倒せ?　とうとう俺を殺しにきたか!　今回ばかりは黒狼の時とは難度が比べ物になんねえぞ。

まるで時が止まったかのように固まる俺を、訝しげに見つめる姫が言った。

「ちなみに、この任務は極秘。つまりはトップシークレットよ。なので騎士団を使うことを禁じます」

「は?　あの……姫様、お言葉ですが……ファフニールがどのようなドラゴンかご存知ですか?」

「当たり前よ!　ブラックドラゴンでしょう?」

不思議な顔をして小首を傾げ姫は答えた。

……ここにもいた。黒竜とただの黒い竜の違いを知らない人間が……。しかもそれが一国の姫君だとは!

おまけに騎士団が使えないときた。とうとう俺を抹殺する為の計画に本腰を入れ始めたな。

……そんなものがあるのかは知らないが、俺はまだ死ぬわけにはいかない!

床に視線を落しながら、なにか良い断り方を探そうと思慮をめぐらした。するとその甲斐あってか、妙案を思いついたので俺は姫に進言した。

「姫様、一つよろしいでしょうか？」

「ん？ なにかしら？」

「そもそもですね、あの大陸に行くには許可証が必要でして――」

「それなら問題ないわ」

「……え？」

許可証の発行には時間を要するはず。そう思っていた俺は意外な返答に驚いていると、姫はルチャさんにペンと紙を持ってくるように指示する。

部屋の隅のチェストの引き出しから、紙とペンを取り出したルチャさんはそのまま姫へと持っていく。それらを受け取ると、姫は何かを書き始めた。しばらくして、出来た！ という声が部屋に響くと同時に、姫はその紙を両手で持ち、広げては満足げに何度も頷く。

「ヴィクトル、ここへ来なさい」

「え、あ、はい」

言われたとおり姫の座る玉座の前へと階段を登り歩いていった。そしておもむろに差し出された紙を取り、俺はそれに視線を移す。書かれていた内容を目にし、驚きのあまり思わず絶句した。

なんとそこには『許可証！』とでかでかと書かれた文字と、『この者を通しなさい！』という如何にもな命令口調で書かれた一文。そしてなにより、それらの言葉よりも更に大きな字で、リリアーヌ・ミュール・ブリタニアの名前が書かれていた。

……しかもあまり字が上手くないという。まさか姫様はこんなあからさまな偽造許可証を俺に持って行かせる気なのか？

「……あの、これは……？」

「見て分からないかしら？ 許可証よ」

あなたバカなの？　と言った呆れた表情で俺を見つめる姫。冷やかな視線が痛い……。

「ま、そういうことだから、世界の平和の為にも頑張ってちょうだい。以上よ。それでは失礼するわ」

そう言って姫は立ち上がり優雅なお辞儀をすると、玉座後方にある扉から部屋を出て行った。“偽造許可証”を手に、俺はその場で立ち尽くす。

すると呆然としている俺にルチアさんが声を掛けてきた。

「どうなさいましたか？」

「え？　あ、いや……姫様は本気なんですか？」

「本気ですよ。何か不満でも？」

「当たり前ですよ！　ファフニールを1人で倒せ？　そんなの無理に決まってる」

「あちらには常駐している王国の騎士団員がいるはずですが」

「それでもです！　『クローネの瓦礫の荒野』の話くらいはルチアさんだって聞いたことあるでしょ！？」

俺はついカッとなって大きな声を出してしまった。何人か部屋の中にいる給仕の女性が、びくりとして驚きの表情でこちらを見ている。

「ブラックドラゴン、ですよね？」

「違いますっ！！」

まさか、ルチアさんまで知らないなんて……。俺を庇い、フォロ―してくれる人はどこにもいないのか。そう思うと急に泣けてきた。

「違っていてもそうであっても、姫様の命令は、絶・対・遵・守ですよ?」

絶対遵守と言う言葉を殊更ことさらにのように強調し笑顔で言う彼女からは、目には見えないが恐ろしいほどのプレッシャーを感じ取れた。

「わ、分かってますけど……」

「けど、なんですか? 分かっているのならさっさと飛んでください。そこに日付が書き込まれているでしょう?」

そう言われ手元の紙を見る。すると確かに日にちが書き込まれていた。その日時はなんと明日。

「明日ですか!? いきなり過ぎます!」

「姫様はいつもいきなりですよ?」

「それが分かっているのなら、ちゃんと教育してくださいよ! あな

たは侍女でしょ?」

「教育出来たのなら、もうとうの昔にされています」

「なっ!? ……あ、諦めてるんですか?」

「あれが姫様ですから」

彼女は満面の笑みを浮かべてそう答えた。もの凄く楽しそうに頬を緩ませている。放任主義とはこういう事を言うのだろうか。……って、そんなことを考えてる場合じゃなかった。

「いくらなんでも無——」

「無茶も無理も通すのが姫様ですので、ちゃんと明日、飛行船乗り場まで行って下さいね? では、私もこれで失礼します」

「あ、あの——」

そこまで口にした言葉を、ルチアさんは再び遮って言った。

「行けるといいですね。魔法都市グリムガンド」

「え？」

振り向きざまに彼女が言った言葉。そしてその瞬間に見せた表情を俺は見逃さなかった。

いま一瞬、悪戯した時の顔になったような気が？ ……俺の気のせいかな？

するとルチアさんは戸惑う俺を置き去りにし、昨日のように振り返ることなく、玉座後方の扉から部屋を出て行った。

姫様に近い人間がいなくなったのを確認すると俺はため息をつく。

「はぁー……なんてこった。団長昇級早々にこんな馬鹿げたクエストが発生するとは……一体どこの世界にあるんだよ!!!」

憂鬱だな。団長になったと思ったら、日も浅いうちに俺は死ぬのか？ どう足掻いても勝てないだろ。なんせ相手はあの伝説に名を残す黒竜だぞ……。無理だ、終わったな、俺。

もう一度大きくため息を吐いた俺は、項垂れたまま謁見の間を後にした。明日の準備をしなくてはならない。行きたくないが仕方がない。

俺のため息は、騎士団寮へ戻る最中も止むことはなかった――。

魔法都市グリムガンド

飛行船の空港ターミナルは城下町の方に設けられている。

騎士団寮からは馬車で大体30分ほどの場所だ。しかも来るのは今日2度目。

理由としては、昨日姫様から許可証だと言われて手渡されたあの紙にある。例え王国の姫様の物であろうとなかろうと、あんな偽造証では特別便に乗船することなど出来るはずもなく……。言葉どおり、俺は受付で門前払いされたのだ。

そのことについて一言言っただろうと、謁見の間へ向かう途中にルチアさんに会った。そしたら会うなり2枚の紙を手渡された。

1枚は魔法都市グリムガンドの往復チケット。そしてもう1枚は魔法都市入出及び滞在許可証だ。しかも公式の物。

驚いた顔をしていると、彼女は悪戯好きな子供のような笑みを浮かべていた。

その表情を見て、俺はようやく気付いた。昨日“行けるといいですね”と言いながら浮かべた意味深な微笑の意味を……。

どうやら大分前から用意していたようだ。その理由を彼女に聞いてみたが、返ってきた言葉が更に意味不明だった。

『あなたがライオンハートに憧れているのを姫様はご存知ですから……。それに……。どうやら姫様には想っている方がいらっしゃるようです……。』

その言葉に俺はこう返した。

「なんで姫が俺の夢を知ってるんですか。大体、俺の任務と姫の想い人となんの関係があるんです？」

彼女は小首を傾げながら答える。

『さあ……』

俺はさらに呆れた調子でこう返す。

「しかし、あんなじゃじゃ馬に好かれてその想われ人も大変ですね」
すると彼女は小さくため息をつきながら言った。

『ええ。姫様が可愛そうです。普段のあんな態度では気付いてもらえないとは思っていましたが……不幸なことにとこの本人が鈍感だとは――』

……さっぱり意味が分からん。一体あの人は何が言いたかったんだ？

しかしそんなことを考えていても俺のクエストが取り下げられることもない。考えるだけ時間の無駄と思った俺はさっさと受付を済ませることにした。

普通の受付とは別に設けられた特別便乗船受付へと向かうと、そこには殆ど人が並んでなく、如何に魔法都市への出入が難しいかを思い知らされる。

実際、特に用事もない一般人が観光目的で気軽に立ち入れるような場所ではなく、乗船の際のチェックは普通便より遥かに厳しい。それはそうだろう。なにせあの悪竜だの云われるファフニールを

封印している地だからな。

「ふう。しかし、持ち物チェックに40分も掛かるとは……」

まあ、嚴重なのはいい事だとは思うが、逐一鎧を脱がせられるのはどうかと思うぞ。着るのも面倒なのに……。それにだ、俺のこの鎧を見れば、確認しなくてもロザリア騎士団の団長だと言うことは王国にいる者なら子供でも知っている事実だ。この鎧は団長専用装備だからな。……まあ、嚴重なのはいいことだと思うが。

そうして搭乗手続きと持ち物検査を通った俺は出発ロビーへと向かった。ロビーは大勢の人々で賑わっていて、いくつも設置された長椅子はほぼ席が埋まっている状態だ。

ここからでも飛行船のいくつかは確認できるが、俺が搭乗するのは出発ロビー最奥の、7番目にある搭乗橋の先にある特別便。他の飛行船に比べると大きさは劣るが、内部の環境はより充実したものになっているらしい。

飛行船よりも遥かに早い飛空艇なるものが出来上がっているらしいが、まだ最終テスト段階みたいで、実用化に向けて急ピッチで推し進められている計画でもある。

なんでも浮遊石を用いた技術みたいだが……。俺は機工学技術などさっぱり分からないためよくは知らないが。

もし飛空艇が実用化されれば、通常ブリタニア王国から魔法都市グリムガンドまで6日掛かるところが、2日ほどで行けるようになるらしい。ぜひ早くお目に掛かりたいものだ。

ほとんど人が歩いていない7番目の搭乗橋を進んだ俺は、ゲートをぐぐり飛行船乗り場へと到着した。

目の前には大きな飛行船が停泊している。この大きさで他よりも

小さいと言うのだから驚きだな。

ブリッジを渡りきり飛行船の船内へと足を踏み入れると、その内装と設備に更に驚きを隠せない。

まるでホテルのような煌びやかなエントランスに、その充実した多機能性のある設備。6日間の飛行でも全然苦にならなさそうな旅になりそうだ。

そして俺は受付で手渡された、シルバーのナンバープレートに刻印された番号の客室を探す。しばらく歩いてみたが、どうやらこの階層にはないらしい。

そこで改めて船内に設置されている案内板を見た。すると、この飛行船は3階層であることが判明した。一人一人の客室は最低限居住が出来るくらいの広さと設備が完備されており、それは階層を上に行くほどより充実し広くなっていくようだ。

「姫の計らいかな? ……いや、ルチアさんか」

自分の持つナンバープレートには72と刻印されている。72号室。案内板で確認すると、それは船内2階の部屋と一致した。1階よりは多少広い造りのようだ。俺はとりあえず2人に感謝しつつ、自分の番号の客室を目指した。

そうして到着した72号室。俺はエントランスの受付で同時に渡された鍵を使って部屋の扉を開けた。その瞬間に目に飛び込んできた部屋の全景は、俺の想像を遥かに超えたものだった。そして俺が発した第一声は――

「寮の部屋より広いじゃねえか!」

そう。俺が使っている騎士団寮の部屋よりも、確実に5倍近くは

広い。目に映る調度品の数々は、素人目に見ても明らかに高い物だと分かる。複雑な彫刻を施された木製のテーブルに椅子。ベッドはダブルサイズの天蓋付きで、脇に設置された照明器具はやわらかくその周囲を照らしていた。

とりあえず持ち物を置く為に部屋を奥へと進む。適当に旅行用の鞆を備え付けのソファアールへ投げると、その横に座って一息ついた。

そこで忘れていた忘れてはならないことを思い出した。

そうだ。俺は任務で来ているんだった。遊びじゃない。しかも今度の相手はあのファフニールだ。

「……どうする」

誰に言うでもなく呟く。『姫の命令は絶対遵守』ルチアさんのその言葉だけがグルグルと頭の中を巡っている。本当ならば行きたくない。行ったら間違いなく死ぬことになる。というか、もう既に飛行船は離陸しているから、今更帰ることも出来ない。

「くうっ！　なんで2人共黒竜の危険性を知らないんだよ！」

あの魔導機械都市クローネをたった一撃で荒野にしたんだぞ！

しかも1000万人もの人々が犠牲になってるってのに……呑気過ぎるだろ、あの姫は。

深いため息を吐いてソファアールに横になる。立派なベッドだが、そこまで行くのも今日は億劫だ。このままここで寝てしまおう。

そうして俺は眠りに付いた――。

俺はソファアールから転げ落ちた状態で目を覚ました。鎧を着たまま寝てしまった為か身体の節々が痛い。ゆっくりと上体を起こした俺

はとりあえず起き上がって鎧を脱いだ。ガシャガシャ音をたてて床に全て置き揃える頃、不意に部屋の扉をノックされる。

『朝食をお持ち致しました』

どうやらモーニングのようだ。あんまりこういう経験がないから少しビックリした。寮では食堂で、しかもバイキング形式だから自分で全て取って運ぶ。誰かに運ばれるなんてのは……シャステイとレストランに出かけた時くらいだな。

旅行用のトランクケースから白のローブを取り出すと、チュニツクとロングレザーパンツの上に羽織る。そして寝癖もそのままに部屋の扉を開けた。

一度頭を下げ、台車を押して中へと入ってきた女性は、テーブルまでそれを運ぶ。クロッシュが被せられた皿を3つとパンを入れた籠をテーブルへと並べ終わると、女性はクロッシュをおもむろに外した。

その瞬間、美味しそうな香りが部屋に拡散し辺りを満たしていく。その中でも特に目を引くのは、メインである牛のロースト。ミディアムレアのいい具合に焼けた肉は5枚にスライスされ、その切り口からは肉汁が流れ出ている。添えられているワインソースには適度なとろみがついていた。

他には野菜の盛り合わせと、ジャガイモのポタージュスープにはネギが添えられている。

俺が1人感動していると、女性はテーブル上の物を指して『食べ終わりましたらそちらのベルを押してお呼びください』と言うと、再び一礼して部屋を出て行った。

……これは来て、よかった、のかもな。

それだけではなく、掃除から洗濯、クリーニングまでも引き受け

てくれるらしい事をその日の内に知った。設備としてはトレーニングルームや、小さいがカジノやバーなんかあって客を退屈させない造りになっている。

そんな丁重な持て成しだったこともあり、この6日間、俺は特に不自由や不満もなく過ごすことが出来た――。

目覚める頃。空の上にいる時のような浮遊感のようなものを感じなくなったと思ったら、船内アナウンスが流れ始めた。どうやら魔法都市に到着したようだ。部屋の外からは人々の話し声と足音が一斉に聞こえだす。

起き上がり身支度を整えると、置きっぱなしにしていた鎧を着用する。ここからは気持ちを切り替えなくてはならない。これから向かう先は、黒竜が封印されている洞窟なのだから。……いや待てよ。まずは駐屯地へ向かうのが先か。

部屋を出てエントランスへ向かうと、俺は受付にナンバープレートと鍵を返して船外へ出る。

長い通路を歩き、ようやく到着ロビーへつく。ゲート前の最終チェックで『魔法都市出入場及び滞在許可証』を係員に提示し、ようやくゲートを潜り抜ける事が出来た。

6日間、長い旅路だった。

空港を後にした俺はとりあえず歩き出す。ブリタニアを発つ前に、ルチアさんから簡易地図だと言われ受け取った紙を鞆から取り出して広げると、その内容に啞然として俺は言葉を失った。というよりは呆れた。

簡易地図。たしかにその通りかもしれないが、簡易も簡易、超適当、超手抜きだ。大まかに書き殴られた『カースの森』の文字、そして左矢印が引かれた先に『駐屯地』の文字。以下略。

「この字は……姫……」

……き、汚い。一国のお姫様だぞ？　もう少し教養があるもんなんじゃないのか……。ガツクリと項垂れると、改めてその文字を見る。するとふと脳裏に蘇った言葉。『あれが姫様ですから』

にここに笑顔のルチアさんの顔までもが鮮明にフラッシュバックする。……教育係があんなじゃ仕方ない、のか？

ため息もそこそこに、とぼとぼと当てもなく歩く。今更気付いたが、ここは草原地なのか？　辺りを見渡した俺の目に映る風景は、ほとんどが背の低い草地だった。

しかもここ魔法都市グリムガンドは、都市と名付けられてはいるが、魔法大陸と呼んでもおかしくないほどにでかい。核になっている浮遊石が相当大きいのだろう。

この大陸の中央にはグリムガンドという名の大都市があり、大陸の東西南北の地にはそれぞれ四元素を司る魔女が住んでいるらしい。

ちなみにファフニールの封印されている洞窟は南に位置している為、管轄は火を司る魔女ガーネットと言うことになっている。だからこれから向かうロザリア騎士団駐屯地からも、恐らく近い場所に住んでいると思う。

空港から一体どのくらいの距離にあるのかは分からないが、とりあえず今踏んでいる道路をひたすら歩くことにした。

確か空港は南東の位置にあったはずだ。カースの森は南西より。と言うことはこの道でたぶん間違いない。

俺が方角を確信して歩き出してからおよそ1時間後――。

一体どれくらい歩いただろうか。もう既に空港は見えない。途中小さな街を見つけたため、腹ごしらえに携帯食料と飲み物を買ったのだが、これが意外に美味かった。食に関しては不満も感じないだ

ろうことは分かったが、一向に目ぼしい道標なども見つからず……。このままでは野宿になってしまう可能性があることを多少不安に思った俺は、先ほど立ち寄った村で一泊すればよかったと1人後悔する。

「でも、そう言えばここらにはあんまりモブがないんだな」

立ち止まり辺りを見渡しても、魔獣の一匹も見当たらなかった。嬉しいような悲しいような。まあ野宿するのに命の危険が少ないことは喜ぶべきかな。

内心ホッとした俺の後方、遠くの方から微かに車輪と蹄鉄の音が聞こえてくるのが分かった。馬車だ。

「なんだ、空港から出てたのか」

眩きゆっくりと振り返ると、その瞬間俺の真横をものすごいスピードで馬車が通り過ぎていった。

「うわっ!!」

あまりの勢いにビックリしたのと風圧で俺は尻餅をついた。騎士団長なのに情けない……。

俺を轢いたと思ったのだろうか。馬車は急停車し、その中から御者が走って出てきた。

「すみません、大丈夫でしたか？」

「あ、ああ。多少驚い——」

「——ってあれ？ あなたもしかして、ロザリア騎士団の方ですか？」

「ん？ ああ、そうだが」

「そうなんですね！ お疲れ様です。あ、もしかして駐屯地に向かわれるのですか？」

「え？ ああ。そ——」

「よろしければお送りしますよ！ さあ、乗ってください」

御者はそう言う俺を無理やり起こし、馬車の中へと半ば強引に押し込んだ。……というか、人の話を最後まで聞けよ！ まあ駐屯地まで乗せてくれるっていうのは有難い事だが……。

乗せられた車内に人はなく、歩くよりも楽でいいのだが……どういうわけか、如何せんスピードが普通の馬より桁違いに速いため、ゆっくりと風景を楽しむ余裕がない。

それに道中気がかりになっていることがあった。こんなに高速な移動手段で、一体料金はいくらになるんだろうか？

俺は駐屯地に着くまで財布を見つめ気が気ではなかったが、目的地に到着し降りた時に、その心配が取り越し苦労で終わったことに安堵する。

この馬車が騎士団員優先車だということを、降りた時に知らされたのだ。

それにしても、何もかもが滅茶苦茶な御者だな。

だがそうは言っても、ここまで乗せてくれたそのことに俺は感謝を述べると、御者は通常業務へと戻ると言って駐屯地を離れた。

改めて今立つ場所から遠くまで広く見渡してみる。ロザリア騎士団駐屯地。中々大きな陣営だ。

そしてここからでも見えるあの森が、カースの森。ファフニール封印の地、混沌の洞窟がある場所。

複雑な思いで森の方を見つめっていると、駐屯地に張られた真っ白なテントが徐々にオレンジ色を差していくのに気付いた。俺は振り返り空を眺める。夕空に浮かぶ太陽はとても綺麗で、本当に任務で

来たのか忘れてしまうくらいに美しかった。

太陽が沈むまで俺はその光景に見入っていたが、沈むと同時に訪れた夜の闇に灯る松明の明りを頼りに、一際目立つ駐屯地の中央に設けられた司令部へと足を運んだ。

そこで上級騎士から報告を受けた後、俺は旅の疲れを癒すべく、今日のところは就寝することにした――。

探索

昨日司令部にて報告を受け、現在の状況をなんとなく把握した俺は1人、カースの森の中に入り混沌の洞窟を目指している。

上級騎士や滞在している他の騎士達が同行すると申し出てくれたのだが、それを断り1人で森へ入ったのには理由がある。

なにせこれから戦うであろう相手はファフニール。伝説の黒竜と呼ばれ、悪竜と謳われる凶暴なドラゴンだ。これまで数々の歴史にその名を刻んできた黒竜の、言ってみれば現行最強モデル。それがファフニール。

王立図書館で黒竜の生態について、少しかじった程度だが読んだことがある。

その書物によると、黒竜は命の危機に瀕した際、体内で卵を生成するらしい。それは現在のステータス値を全て引き継いでいるらしく、口から吐き出された卵はその瞬間から、何人たりともその結界を破ることの出来ない特殊な力で守られているそう。

そしてその絶対不可侵領域を保ったまま、黒竜の卵はやがていずこかへと消える。それがどこへ行くのかは未だはっきりとした事は分かっていないらしい。

そうして孵化した卵からは小さな黒竜が生まれる。小さいながらもその力はブラックドラゴンすら畏怖するものだそう。

可愛らしい咆哮からは想像もつかないほど凶悪な力で、他の存在を蹂躪していく。やがて人々を襲うようになり、そして喰らい、黒竜はその力を少しずつ蓄えながら成長していく。

そんなドラゴン相手にあいつらを巻き込むわけにはいかない。しかもこれは俺に課せられた姫からの勅令だから尚更だ。

……まあ本当の事を言うと、とりあえずどんな竜なのかを見に行くだけだから、付き添いなんて必要ないんだ。今朝手渡された洞窟内の地図によると、ファフニールが繋がれている大広間の入口からはその様子が確認出来そうだからな。ある程度の距離があるらしいし。

どのくらいの大きさで、弱点になりそうな部位はあるのか。そして奴から感じられる力の程を偵察しとくのは、戦術の基本だしな。

まあ果たしてそれが本当に参考になるのかは微妙なところだが……。

駐屯地を出てからおよそ15分。森の中の整備された道をひた歩き、ようやく目的の洞窟入口へとやってきた。ほぼ一本道だったから助かったな。

洞窟手前でいったん立ち止まり、上を見上げる。岩壁に大口を開けた入口の上には、金属プレートが打ち付けられていて、そこにはこう書かれていた。

『ファフニール封印の地』

ゴクリと喉を鳴らして唾を飲み込むと、俺は携帯用松明に火を点けて一歩一歩入口へと近付いていく。あと一歩の所で再び立ち止まると、自分が冷や汗をかいているのに気付いた。

まだファフニールすら見てないってのに、俺は……チキンか……？

雑念と一緒に恐怖心が離れてくれるのを願い、俺は何度も首を振った。

「よしっ！」

気合を入れなおし、闇へ誘おうとしているような洞窟入口へと、

足を踏み入れた。

しばらく狭い通路を直進すると、やがて広い空間へと抜ける。松明を動かし一通り照らしてみると、数え切れない程の階段があるのが見えた。まるで迷宮のようなその造りに、一気に面倒臭さが漂ってくる。

俺は項垂れると、手にした地図に視線を移す。

今立っているのは入口からすぐの位置だ。地図にもここからの案内が書かれており、同じ場所にバツ印が付けられている。そこから引かれた線に沿って俺は歩き出すと、道のりが意外と単純なことに気付いた。

これだけ複雑そうに見えて、もしかして大広間はすぐなのか？
有難いような迷惑なような……。

まあどうせ洞窟内の宝もないだろう、そう思った俺は素直に道案内に従うことにする。

階段を上り、細い通路を通ってまた階段広場へと出る。そしてまた階段を上って下りての繰り返し。地図上に引かれた線は単純なものだが、地図がなかったら間違いなく俺は迷子になっていることだろう。

そうしてしばらく案内に沿って歩いていると、とうとう最後の通路へと入った。少し身を屈めながらでしか通れないほど狭い通路を少し歩くと、足元に何かが落ちているのに気付く。俺はしゃがんでそれを拾い上げてみた。

「ん？ ……菓子、の、包装紙？」

なんでこんな所に……。あゝそうか。あいつらの非常食かなんかな？ まさかこんな所にピクニックに来る奴がいるとは思えないしな。

俺はゴミをポイツと投げ捨てると先を———と思ったが、投げ捨てたゴミを拾い上げてガントレットの中に納めた。

「危ない危ない。そうだ、団長に怒られるぞ」

そう。団長の口癖だった。“立つ鳥跡を濁さず”今はもういないけど、騎士団寮にはその言葉が、まるでスローガンのように掲示板に貼られている。

小さくため息をつく、俺は再び歩を進める。出口らしき向こうからは光が漏れている。洞窟内で唯一陽が射す場所、それが大広間らしい。恐らくここを抜けた先に、黒竜ファフニールが封印されているんだ。

より一層の緊張感を持って、少しずつ出口への距離を縮める。松明の火をいったん消し、壁に手を添えながら、光で目が眩まないように目を閉じて闇を抜ける。その時俺の緊張感は最高潮に。そしてゆっくりと瞼を開けた。

目が光に徐々に慣れ、視線の先を映し出す。

「——えっ?!」

しかしその光景を見て、自分の目を疑った。目の前に広がっていたのは、壮絶な戦闘の跡のような凄惨な現場だったからだ。

地面には水晶の残骸がそこかしこに散らばり、広間の壁は大きく決れている。そして肝心の……黒竜の姿が、どこにもない。

「なんで?　もしかして誰か倒した……のか?」

いや、そんなことはあり得ないだろう。こんな狭い所での戦闘なんて、明らかにドラゴンの方が有利だし。ここに軍団が入ると思えない。1人で倒したなんてこともまず考えられないし……。

「一体どうなってんだ？」

机上からの報告は一切なかった。ということは、いつからか知らないが、皆ファフニールを恐れてここまでは見回らなかったという事か。

俺は奥の方に見える、何かが寝そべっていた跡のような場所まで歩いていく。すると、またしても通路で見つけた菓子の包装紙が落ちていた。

「ん？？？ ……なんだ？　もしかして空から降ってきたのか？」

ゴミを拾い、そして空を見上げた。鳥獣が……菓子なんか喰うわけねえだろ！

ん？？　もしかしてファフニールが……なわけないか。第一、誰がここまで菓子を差し入れに来るんだよ。命知らずにも程がある、と言うより、もしそうなら絶対喰われてるだろ、そいつ。

視線を大地に移すと、ここから辺りを見渡した。散らかっている大広間には、モブの骨なんかもあちこちに散乱している。多分ファフニールが殺ったんだろうな。

しばらくの間、腕を組みながら考え込んでいたが、目標のいないこんな場所に留まっても仕方がないことに気付くと、ゆっくりと来た道に戻る。

「ん？」

すると途中、周囲を見ながら歩いていると、何やら光を反射して輝く物体が目についた。俺はそちらへ近付き、アメジストの欠片に混じるように埋もれる“それ”を手に取ると注意深く観察する。

「なんだこれ？」

手にした物はおよそ3cm程の大きさで、まるで涙のような形をしている。光にかざすと七色に光る透明な宝石のようなものだった。角度によって様々な色を映し出す不思議な石。

しばらく見ていて分かったが、七色に光るのは陽にかざした時だけのようで、それ以外は諸条件により、淡い単色に変化していくらしい。

「はあ。まったく、なんの役に立つんだよ」

あまり価値のなさそうな宝石をぽいっと投げ捨て、先を急ごうと一歩踏み出す。しかしそこで思い留まり、1人思料する。

ファフニールはいなかった。どういうわけかいなかったんだ。もしファフニールを倒せてないのに、このこ王国に戻ろうものなら……やばい、きっとルチャさんがそれを知ったら殺されるぞ。

その時の状況を想像しただけで血の気がサーツと引いていく。一度身震いすると、今しがた捨てたばかりの宝石を拾いに戻る。

「まあ本当かどうかは知らないが、女は宝石に弱いって団長が言っていたからな……。とりあえずルチャさんに……。いや、ここは姫の機嫌取りでもしておけば、ルチャさんも文句は言わないだろう……。うん」

俺は手にした宝石を、鎧の首もとの隙間からチュニックの下に着ているインナーの中へと大事に納めた。そうして大広間の出口へと歩いていく。

手前まで歩いてくると、俺は一度振り返り広間の全景を見渡す。小さな湖と薙ぎ倒された木々、そしてアメジストの欠片と挟れた壁。

ここで一体何があったのか、俺には知る由もないが、とりあえず駐屯地に戻ろう。そして何か知っているかもしれない、ガーネットという魔女に話を聞きに行かなくては。

携帯用松明に火を点けて踵を返すと、再び暗い洞窟内へと戻った。来た道を帰ればいい為、そこまで帰りは迷うことなく洞窟を抜けられた。

やはり暗い洞窟内よりも、自然の光の下の方が心地いい。背伸びをした俺は森を西に、つまりは右手側に向けて歩き出す。

そうして15分。ようやく洞窟から駐屯地まで帰還すると、俺を迎えたのは十数人の騎士達だった。

『団長！ よくご無事で』

口々にそう言われ多少反応に困ったが……とりあえず騎士達に釘を刺しておくことにした。

「今日から洞窟内は一切の立ち入りを禁じる」

『何故ですか!?!』

「えっ? ……あゝそれは……」

い、言えない。ファフニールが消えてたなんて、言えるわけないだろ!

しかし、こいつらが真面目に見回りして国に報告してれば、今頃こんなことにはなっていない気が……。

「それは! ……ファフニールが、た、大変、お怒りだからだ」

『それは、危険ですね』

「そうだ。危うく俺もブレスの餌食になりかけた」

我ながら下手糞な嘘だな。目が泳いでるのが自分でも分かる。：
：こんなんで団員達が信じるわけ――。

『分かりました。今夜からの見回りはカースの森だけということを、皆に伝えておきましょう。それと混沌の洞窟付近は立ち入れないように、規制をかけておきます』

って、信じたー！ ……まあ結果オーライだな。

「そういうわけで、俺はこれからガーネットとやらに会いに行かなくて是不ならない」

『紅蓮の魔女ですか？ そういうことでしたらご案内しますよ！』

「いやー！ いい。一人で行ける」

『いえ、馬車もありますし――』

「いいつつってんだろ！ 歩いていける距離だろ？」

『ええ、まあ』

「よし。そういうことだから、とりあえず地図をくれ」

『？ はあ……』

危ない。今こいつら明らかに不信そうな顔をしやがった。ファフニールが消えたなんて事が知れたら、きっとパニックになるぞ。その前にどうにか手を打たなければ。

1人考え込んでいると、司令部の中から1人の騎士が走ってきて俺に声を掛けた。

「団長、これが紅蓮の魔女の家への地図です」

「お、サンキュー。じゃ、俺はとりあえず魔女に色々話を聞いてくるから、くれぐれも誰も洞窟には立ち入らないようにな」

そう言うと、騎士たちが一斉に敬礼しながら返事をした。

『ハッ!!』

こういうのを見ると、やっぱり俺は団長に昇級したんだって実感が湧く。今までは俺もそういう立場だったこともあり、なんだか不思議な感じもするが……。

駐屯地を出ようと意気揚々と一歩踏み出したが、不意に腹が鳴ったことでその気を削がれた。そう言えばもう昼だ。余計な気ばかり使っていたから、普段の倍くらい腹が減ってる気がする。

俺は駐屯地に設けられた食堂テントにて昼食をとることにした。

そうして昼飯を食べ終えた俺はガーネットに会うべく、見送りに出てきた騎士たちに背を向けて駐屯地を後にした。

地図によると、この駐屯地から右の道を歩いていくと、十字路に差し掛かるらしい。そこまで行ったら、その十字路を右に進んで、あとはひたすら真っ直ぐ歩くだけ。

……なんだ、これなら口頭でもよかったんじゃないか。俺は地図を見るのをやめて、豊かな草原地帯を右手に見ながら、散歩気分ですくことにした。

本当にここはモブの遭遇率が異様に低いな。何故だ？　ガーネットの管轄区域だからか？　それともただ大人しいだけなのか……。

こうも戦闘がない事が暇だとは思わなかったな。副団長だった頃は本当に……あ、そうか。うさぎ跳びでもしながら行けばトレーニングにはなりそうかな。騎士団長の鎧は副団長の鎧よりも多少重いし。

今は無きトレーニング地獄の日々を回想していると、俺の目の前をモブが通り過ぎた。

「あ？」

見間違いだろうか、もの凄くド短足な犬型のモンスターだったような気が。そいつはそそくさと単体で草原の方へと駆けていった。まるで俺がいなかった事のように。

「なんだ、ちゃんといるんじゃないか」

それにしても人間がいるってのに、エンカウントしないとは……。どれだけこのモブはやる気がないんだよ。つまらん。

ぶつぶつと文句をたれながら歩いていると、目的の十字路に差し掛かる。そこには木組みの立て看板が置かれていて、簡単な道案内が書かれていた。左はカースの森、そして右はクーリエの街。

「たしかここを進行方向から見て右だったな」

俺は地図を思い出し、立て看板から見て正面の道路を進んだ。ここを真っ直ぐ歩いていけば、変わった屋根の家が見えてくるらしい。いったいどんな魔女なんだろうか。あのファフニールを封印した4人の魔女の内の1人。紅蓮の魔女の異名を持つガーネット。

俺は今までパーティーなんか組んだ事がないため、他のジョブの人間をあまり見た事がない。まあ、とりあえずの目標は騎士団長になることだったから、それ目指してがむしやらにやってきたし、しようがないことかも知れないけど。

「……楽しみで仕方がないな」

これから待ち受ける出会いに俺は心を弾ませ、自然と歩くスピードを上げていた。

ガシャガシャと鎧が音をたて、軽快なリズムを奏でる。駐屯地を離れてからおよそ20分。ようやく目的の魔女の家が見える距離ま

で歩いてきた。

遠目でも分かるが、確かに変な屋根だ。魔女のかぶる様なつばの広いとんがり帽子の形をしている。

俺は緩やかな坂道を下り、そして小高い丘へと続く道を上っていくと、ついにガーネットの家へ到着した。

「ふう」

なかなかの距離だったな。小さくため息をつくとき、改めて家を見る。

家は太い円柱状の造りで、1階には大きな窓が左の側面に見える。おそらくそこがリビングだろう。家自体は3階建て位の大きさで、煙突らしき部分からはなんとも形容し難い妖しげな煙がもくもくと立ち昇っていた。2階部分と3階部分の窓も、太陽の光が沢山入りそうな大きさだ。

魔女って言うくらいだから、もっと陰暗な所に住んでるのかと思ってたなら、意外と普通だな。デザインうんぬんは置いといて……。

少し緊張しながらも玄関へと近付き、俺はかぼちゃの形の呼び鈴を鳴らした。

魔女と少女とパンプキン

かぼちゃの目が光ると同時に、家の中からカランコロン、という鐘のような音が響いた。

俺は一步下がって、人が出てくるのを待つ。返事くらい聞こえてもいいと思うのだが……そうして5分ほど待っただろうか。

しかし、一向に目の前のドアが開かれることもなく、再びひし形をしたかぼちゃの鼻を押してみた。すると先程と同様に、三角のかぼちゃの目が赤く点滅を繰り返す。しばらく待っていると――。

てとてとと、家の中から歩幅の狭そうな小さな足音が聞こえてきた。そしてその人物は外にいる俺に返事をする。

「はぁーい」

ん？ 子供……？

もしかして、ガーネットって子供だったのか？ 紅蓮の魔女って言うから、てっきり――。

想像に反したその幼い声に、少し疑問を抱きつつ考え事をしていると、不意に玄関のドアが開いた。

とりあえず俺は開かれた扉の正面を見据える。だが目の前には顔がない。まさかと思い、視線を下げる。

するとそこには、小さな女の子がドアに手を添え、こちらをジッと見つめて立っていた。

「うおっ!？」

「おにいちゃん誰なの？」

仰け反った俺に金髪碧眼の可憐な少女は、大きくてくりくりとした純粋な瞳を向けながら尋ねてきた。

「あゝそっか……。えゝつと、君がガーネット？ ……じゃない、えつと、俺はブリタニア王国ロザリア騎士団の団長、ヴィクトル・ノーティスだけど……」

うゝん。大人を相手にするよりも緊張するな。つうか子供なんかと遊んだこともないしなあ。どう接すればいいんだろう？

「ヴィクトル？」

「ん？ そう。それで、君がガーネット？」

首を傾げてこちらを見つめる女の子に、俺は名前を訊ねてみた。すると少女は首を左右に振り答える。

「ううん、違うの。わちはレティだよ」

「レティ？」

まあそりゃそうだよな。ファフニールを封印したって……いくら4人でもこんな子供が出来るわけないか。

大体、ファフニールが封印されたのは7年前だ。この子はどう見たって7、8歳位じゃないか。普通に考えれば分かることだな。

頷きながら1人で納得していると、レティは急に話しかけてきた。

「ババに会いに来たの？」

「ん？ ……ババ??」

「うん、ババなの」

「……ババって、もしかして——」

「うん、ガーネットなの」

少女の言葉を聞いた瞬間、俺の思考回路が突然プツリと切れた。
紅蓮の魔女って……ガネットって……婆さんだったのか。

俺の想像じゃ、ガネットは色っぽくて俺より少し年上で、普段はツンケンしてるんだが、実はそれは照れ隠しの表れで、本当はちよつと恥ずかしがりやな可愛い女性。っていうのを想像してたんだが……。

まさか婆さんだったなんて……。あゝ、一気に会う気が失せた。
……いや、会わなくちゃならないんだけどな。なんせファフニールが……はあゝ。

大きいため息を吐きながら項垂れる俺を、レティは不思議そうな顔をして覗き込んでくる。

「どちらなの？」

「ん？ ……いや、なんでもないよ」

そう言うと少女は訝しげな表情で小首を傾げた。しばらくそのまま俺を見返していたが、何かに気付いた様子でレティは急に空を見上げる。

「あ、ババが帰って来たの」

「え？」

そう言われて俺も振り返り、そして空を見上げた。見てみて気付いた少女が空を見上げた意味。

向けた視線の先を瞳が写したものに、俺は驚きを隠せなかった。なんと、人が箒に跨って空を飛行しているじゃないか！

ストロベリーブロンドと言うのだろうか。その人物は美しいピンク色の髪を風になびかせながら、颯爽とこの家に向かって飛んでく

る。真っ赤な衣装が目立ちすぎるほど空に映え、まるで赤い絵の具を空に塗ったように鮮やかだ。

そうしてレティがババと呼んだ人物は、速度を落とし家から数m離れた所で止まるとその場でホバリングをする。そしてそのまま高度を落とし、ゆっくりと静かに地面に降り立った。

箒を左手に持ちこちらへ向かってくるその女性は、断じて“ババ”と呼ばれるような年齢ではない。

容姿は一言で言うならば「妖艶」。目鼻立ちが整っており、他を寄せ付けない孤高の一匹狼のようなその鋭い目付き。

均整の取れた美しいプロポーションを、紅蓮の魔女の異名をとるに相応しい真紅のドレスを身に纏い包み込んでいる。そのドレスのサイドには大きくスリットが入っていて、多少目のやり場に困るデザインだ。

それにしてもなんて失礼な子供だ。こんな美人をババ呼ばわりするとは。

しかし俺の姿を確認すると、その女性は手をひらめかせ鬱陶しそうに言い放つ。

「勧誘なら間に合ってるよ」

俺のすぐ隣に立つと、女性は更に高圧的な視線を向けて、ふんつと鼻を鳴らした。

……なんだ？ めちゃくちゃ態度がでかい女だな。

まあそこはとりあえず置いて。俺はここへ来た理由を、このガーネットらしき人物へと伝えて勧誘じゃないことを証明することにした。

「あんたがガーネットか？」

「ん？ ああ、そうだけどねえ。あんた一体誰だい？」

ガーネットは、明らかに不信な視線を向けてくる。
しかしそんな時、俺たちの様子を下から見上げていたレティが声を上げた。

「ババ、このおにいちゃんはヴィクトルなの」

「ん？ ヴィクトル？」

「うん。王国の騎士なんだって」

「ブリタニアの……？」

そう言って魔女は、品定めするように再び俺を見た。そして顔をしかめながら、何故か気まずそうに声をかける。

「い、いったいブリタニアの騎士が何の用だい？」

「ああ、勧誘じゃないことは信じてくれたのか。まあ、単刀直入に言わせてもらおうが、混沌の洞窟のことだ」

俺が“混沌の洞窟”というワードを口にした瞬間、ガーネットは身体をビクつかせて目を丸くした。

……なんだ……？ まさか、この女が倒したとか？ ……いや、本人が目の前にいるんだ。推測する必要なんかないんだけど。

目が泳いでいて明らかに様子がおかしいガーネットは、しばらくの間口をつぐんでいたが、静かに口を開くと言った。

「まあ、中に入んな」

「え？ いいのか？」

「立ち話で済むような話じゃないんだろう？」

「……ああ。じゃあ、お邪魔します」

そう言って頭を下げた俺は、魔女の家の中へと通された。玄関で鎧のブーツを脱ぐと、用意されたスリッパに履き替える。

そして何故だか知らないが、レティは凄くテンションが高い。紫色の長いローブの裾をひらめかせながら俺をリビングへと案内する。そしてリビングに置かれたテーブルの椅子を引き、そこに座るように促した。

素直にその椅子に腰掛けると、少女も隣に椅子を持ってきてそこに座る。ガーネットはと言うと、オープン式のキッチンの方でなにより飲み物を作っているようだ。

その間、俺はリビングの中を見渡してみる。改めて見てみると、外からでは分からなかったが相当広めに作ってあるようだ。まあ、屋根の大きさを見れば家自体が大きいことは分かるのだが……。

それにしても不思議な光景だ。壁に設置された大棚には様々な大きさのフラスコが置かれていて、なんとも形容し難い色をした液体が入れられている。

その付近には干乾びたトカゲが天井から吊るされており、髑髏なんかも棚には置いてあった。

棚と棚の間の奥には大きな釜が置かれており、時折、ゴポツという音をたてていることから、何かが煮られていることが分かる。

……俺が思ってた「魔女」のイメージそのままだな。

あまりの物珍しさにキョロキョロしていると、レティが話しかけてきた。

「どちらなの？」

「ん？ いや、珍しいものが沢山あるなと思ってね」

「そうなの？」

不思議そうな顔で俺を見つめる少女に微笑み返すと、キッチンの

方からガーネットの声が聞こえてきた。

「レティ、こいつを運んどくれ」

「はぁーい」

魔女に呼ばれた少女は椅子から飛び降りると、キッチンの方へと走っていく。そしてガーネットに渡されたトレイを持ち、テーブルへと戻ってきた。

そして俺の下まで来ると、レティは「どうぞ」と言って手を震わせながらそれを差し出した。

「ありがとう」

少女に礼を言うと、少し重そうに見えたのでトレイごと受け取ってティーセットをテーブルに並べる。

するとレティは嬉しそうな笑顔をこぼし、再び椅子によじ登って着席する。ガーネットも茶請けを手にもちらへ歩いてくると、俺の対面に位置する椅子に静かに腰掛けた。

「それで、話つてのは具体的に何のことだい？」

そうやってティーポットを持ち、カップに紅茶を注ぎながら彼女は俺に問う。礼を言いながら紅茶の注がれたカップを受け取ると、その問いに答えた。

「俺はある任務のためにこの大陸に来た……いや、来させられたんだ。それで今朝混沌の洞窟に行ってみたんだ。そしたら、ファフニールがいると言われていた大広間にその姿がなかった。しかも戦闘をしたような痕跡まで残ってたんだ。もしかしたらそのことについて、ガーネットが何か知っているんじゃないかって思ってたさ」

「任務？」

「ああ。姫様からの勅命で、ファフニールを討伐してこいって……」
「なるほど」

話を聞き、納得したように一言そう呟くと、彼女は目を伏せたまましばらくの間押し黙る。ややあって小さく息を吐き、真っ直ぐ俺を見据えたガーネットは口を開いた。

「ファフニールは、もういないよ」

「えっ？ ……ってことは、あんたが倒したのか？」

「いや、正確には“黒竜”はもういないって言った方が正しいか」
「ん？ それはどういうことだ？」

彼女に疑問を投げかけた丁度その時、玄関のドアが静かに開けられた。俺は音に釣られてそちらへ視線を移すと、そこには背の低い大きなかぼちゃ頭が、買い物袋を抱え立っていた。

そいつは黒のスーツに赤い蝶ネクタイ、そしてオレンジ色の手袋と変わった形のブーツを履いて、赤いマントを羽織った変ないでたちをしている。

「……なんだ、あれは？」

「あつ、ジャックー！」

「……ジャック？」

話の最中、隣で大人しくお菓子を食べていたレティは、目を輝かせ椅子から飛び降りると、そのかぼちゃ頭の方へと駆けていく。

「レティ、ただ今戻りましたよ」

丁寧な言葉遣いでそう言うと、かぼちゃは駆け寄る少女の頭を優

しく撫でる。

……だから、こいつはなんだよ？ かぼちゃが喋るなんて聞いてないぞ。……ていうか、こんなの見たら、明日からかぼちゃ食えなくなるじゃないか。

訝しげな表情でかぼちゃ頭を見つめる俺に、ガーネットはクスクスと笑うとその紹介をした。

「あいつはジャック・オ・ランタンのジャックさ。見ての通りかぼちゃで出来てる」

「あれがジャック・オ・ランタン？」

「なんだい、知ってるのかい」

「いや、年に1度ハロウィンって行事があるんだけど……その時にかぼちゃを飾るんだが……まさか動いてる本物がいるとは知らなかった……」

しかも四肢があり、ちゃんと喋ってるんだ。驚かないほうがどうかしてるぞ。

まるで鳩が豆鉄砲をくらったような顔をしている俺に、魔女は腹を抱えて必死に笑いを噛み殺す。そんなガーネットを横目で見てみると、ジャックが俺に話しかけてきた。

「あの、あなたのその鎧は、ロザリア騎士団のもんですよね？」

「え？」

近くで声がしたものだから、そちらへと視線を移す。と——視界いっぱい広がるかぼちゃにビックリして、俺は仰け反った拍子に椅子から転倒した。

それを申し訳なく思ったのか、ジャックは「どうもすみません」と言いながら手を差し出す。差し出されたオレンジ色の手を取ると、

俺は立ち上がってかぼちゃを見下ろした。

「ってちっさ!!」

「っ!?! 失礼な人ですね……。ところでガーネット、こちらの方はどなたですか?」

三角だった目の部分を多少つり上がらせ、ジャックは俺の正体をガーネットに尋ねる。すると彼女は、肩をすくめて一言。

「さあ、誰だったかねえ?」

「おい、ヴィクトルだって言っただろ!」

「そうだったかい? ……まあそんな気もしないでもないが……。そう言えば、あたしもまともに自己紹介してなかったねえ」

「いや、言わなくてもあんたは有名だ――」

「まあそう言うんじゃないよ。あたしはガーネット。このグリムガンドの南方の守護を任されてる魔女さ。そしてあの子がレティ。ドラグナーの娘だ。まだ小さいがその潜在能力は折――」

「ちょ、ちょっと待った!」

せっかく紹介してくれてるのは悪いが、つい気になった言葉があり話を中断させてしまった。

今、確かに“ドラグナー”って聞こえた気がしたが……。俺は少し機嫌の悪そうな魔女へ恐る恐る訊ねてみる。

「今、もしかしてドラグナーって言ったのか?」

「ん? だったらなんだい」

「じよ、冗談だよな?」

「冗談でも嘘でもないよ。あの子はれっきとしたドラグナーだ」

「……マジかよ……」

こいつは驚いた。レティがあのだラグナー、ドラグナーだなんて……。嘘かと思ったが、ガーネットが言うんだからそうなんだろう。嘘を言っているようにも見えないしな。

……この子があのだラグナー。竜に変身したり、竜を従える力を持つと言う、伝説のジョブの1つ。

俺は改めて少女を見やる。ジャックに抱きついてじゃれている女の子。レティはこちらに気付いて俺を見返すと、目をぱちくりとさせて首を傾げた。

そんな少女から視線をガーネットの方へ戻すと、俺は疑問を投げかける。

「そう言えば、レティはガーネットの娘なのか？」

「ん？ 違うよ。あの子はあたしの子じゃない。孤児になっちゃったから預かったんだ。それにあたしはドラグナーじゃなくウィッチだしねえ」

「そうだったのか……」

「まあ、大きくなったら間違いなくあたしを超すだろうねえ」

「あんたをか?!」

「そうさ。なにせ――」

ガーネットが自分を超えるであろうその理由を話そうとした時、不意にリビングから二階へと続く螺旋階段から足音が聞こえた。

それに気付いた魔女は、口を開けたまま固まっている。何故だろうと思う、俺は階段の方へ視線を移すと、身長の高い黒髪をした人物の頭が見えた。

その人物はリビングへ立つと、男性であることが分かる。俺より身長が高く、全身を漆黒のローブで包み、腕には鎖のようなものが巻きついていていた。その瞳は燃えるような赤。真紅と表現した方が早いだろう。

訝しげに見る俺を余所に、その男は頭をポリポリと掻きながら、眠たそうにあくびをして言った。

「まったく、さっきから煩いな。静かに寝させてくれると有難いんだがな……ん？」

俺を見つけたその男は、数回瞬きをすると、何かを閃いたように声を発した。

「おっ！？ その鎧はブリタニアの騎士団のものか？」

「え？ あ、ああ。……って、あんた誰だ？」

「ん？ 俺か？ 俺は――」

男がそこまで口にしたその時、レティが嬉しそうな声を上げて男に駆け寄って行った。その言葉を聞いた瞬間――俺は驚きを隠せなかった。

「あつ、ファフニール！」

……あ？ ファフニール？ この男、あの黒竜と同じ名前なのか……。

レティはファフニールと呼んだ男の足に抱きつく、今までより更に嬉しそうな笑顔をして見上げているのが、こちらからも窺えた。

しかし何だこいつは？ 何故かは分からないが、なにか人とは違った不思議な雰囲気漂わせている。

風貌も然ることながら、何よりもその目だ。どういうわけか、男の瞳は人間のそれとは形を異にする。

俺は再びガーネットへ視線を戻すと、彼女は頭が痛そうにこめかみに手を当てながら首を振っている。

そして顔を上げた魔女は、この場にいる全員を招集し、そして各々テーブルやソファに座らせた。

対峙

俺とガーネット、それと黒衣の“ファフニール”と呼ばれた男はテーブルへ。そしてレティとかぼちゃのジャックはソファに座っている。

魔女は足を組み、スリットから艶かしい太ももをちらつかせながら、少し椅子を引いて座り、腕を組んで目を閉じている。黒衣の男は何故かそれを嬉しそうに見つめ、何度か頷いた後に声を上げた。

「ところでガーネット。一体俺たちを座らせてどうする気だ？」

すると目を閉じていた彼女は、小さくため息をつきながら言った。

「どうするもこうするもないよ。これからヴィクトルに説明するんだ」

「何を？」

「何をって……そりゃ洞窟のこと、そしてあんたのことだよ！　ったく」

語尾を荒げ、彼女は再び腕を組んだままこめかみに手を当てる。

俺は今の会話の中に少し気がかりがあり、そのことについて訊ねてみた。

「なあ、この男がどうかしたのか？」

「はあ……。順を追って話すから、少し待ってな。ったく」

明らかに不機嫌そうに顔をしかめる魔女は、どうやら考え事をしているようだった。ぶつぶつと小声で何か言いながら、時折首を傾

げては横に振っている。

レティとジャックはそんな俺たちを余所に、かぼちゃの形をしたボールを投げ合い2人して遊んでいた。

かぼちゃのお化けがかぼちゃ投げて遊んでるとか……なかなかシユールな絵面だな。

その平和な光景を呆けて見つめていると、不意に隣から男に声を掛けられる。

「そう言えば、その鎧は最上級の騎士鎧だが、お前もしかして騎士団長なのか？」

「え？ ……ああ。でも、それがどうかしたのか？」

「いや、随分と若い奴が団長やってるんだなと思ってな」

「……。でもどうして俺が騎士団長だと分かったんだ？ もしかしてあんたも騎士団にいたのか？」

「いや。昔戦ったことが何度もあるんでな」

「あんたまさか帝国の騎士か？」

「いや……そう言うわけじゃない——」

頭をポリポリと掻きながら何か渋った様子でそう答える男を見返すと、正面に座るガーネットから深いため息が聞こえた。重い空気を纏ったようなため息が気になり、そちらへ視線を戻すと、彼女の鮮やかな翠瞳すいとうが俺たち2人を交互に見てくる。

「ヴィクトル」

「ん？」

「とりあえずあんたが聞きたいことを今から話してやるよ」

「あ、ああ」

「少しばかり長くなるかもしれないけどねえ……」

「構わないさ」

そう答えると、ガーネットは一度静かに目を閉じ、そして開けると小さく息を吐いて話し始めた。

「まずファフニールのことだ」

ついに事の真相が聞ける。少し緊張しながらも、唾を飲み込んで次の言葉に備える。

「ファフニールはもうあの洞窟にはいない。それは間違いない」

「うん。それは見たから俺も知ってる。あんたが倒したのか？」

「いや、あたしは何もしていないさ。何かしたとすれば、レティだが……それは後で話そう」

「レティ……？ ああ、まあいいや。……それで？」

「実を言うと……ファフニールは……今、あんたの隣に座ってる」
「は？」

ガーネットは頭を押さえながら、少し呆れた様子で隣に座る黒衣の男を見る。俺は釣られて視線を移すと、男も俺を見返してきた。話の筋も意味も分からず、彼女に向き直ると問いかける。

「いや、こいつがファフニールって……ただ同名なだけじゃないのか？ そもそも、ドラゴンが人間になるなんて話聞いたことないぞ」

「そんな話はあたしだって聞いたことないよ。だが事実だ」

「……ん？ なにが事実なんだよ、分かるように説明してくれ」

「あんたも面倒臭い男だね！ 事実が事実なんだ、とりあえず受け止めな」

「受け止められるか！」

双方共に声を荒げ、視線がぶつかり火花を散らす。そんな一触即

発な空気の中、何にも動じない男が話しかけてきた。

「フアフニールが混沌の洞窟にいないのは本当だ。なにせここにこうして座ってるからな」

「……。そんなことは今ガーネットに聞いたから分かってんだよ！
ったく、頭わりいのかこいつ」

「なに！？」

「あーもう煩い！ レティ、ちょっとこっちに来な」

ガーネットがテーブルを叩き、立ち上がってレティを呼ぶが、少女の返事は聞こえてこなかった。俺も部屋を見渡してみたがその姿は見当たらず。

すると外から、ジャックと共にレティの話し声が聞こえてきた。
どうやら2人で遊んでいるようだ。楽しそうな笑い声が外から聞こえてくる。

「はあ、ったく。肝心な時に何やってんだいあの子は」

魔女はテーブルに両手をつき、項垂れたまま首を横に振った。
しかし、なんでレティが関係あるんだ？ ……そう言えばさっき
レティがどうの言っていたが……。

「なあガーネット」

「ん？ なんだい」

「レティがなんかしたのか？」

「なんかも何も……そもそもの原因はあの子だよ」

「ん？ ということだ」

「ちよいと待ちな。レティー！ 戻っておいで」

俺との会話を一時中断し、ガーネットは大声を上げてレティを呼

び戻す。その声が聞こえたのか、少しして、少女は玄関を開けてかぼちゃと共に帰ってきた。

しかしその表情は詰まらなさそうで、ふくれっ面をして歩いてくるレティを、少女より少し身長の高いかぼちゃが頭を撫で慰めながら歩いてくる。……これまたシュールな絵だな。

レティとジャックがソファに座ると、それを確認したガーネットが少女に声を掛けた。

「レティ、ヴィクトルにファフニールの事を話してやりな」

「え？ どうしてなの」

「訳ありで聞きたいんだと」

「そうなの？」

レティは首を傾げながら俺を見つめる。

そしてしばらくの間、うくと腕を組みながら考え込む。少女は急に立ち上がって俺達の方へ歩いてくると、隣に置かれたもう一つの椅子によじ登り、一息ついて話し始めた。

「わちがファフニールをお外に出したの」

「レティが？」

「うん」

「いや、でもどうやって……」

「魔法を作ったの」

「魔法を？」

怒られると思っているのだろうか、レティは少し申し訳なさそうに手をもじもじとさせながら上目遣いで話している。

そんな少女の発言に驚いていると、ガーネットはそのことに対しての補足で説明をしてくれた。

「ドラグナーはあたしたちウィッチとは違ってね。四元素全ての魔法が使えるだけでなく、固有の魔法として“竜言語魔法”ってのが扱えるんだ」

「竜言語？」

「そう。その名の通り、ドラゴン達が使う魔法の事だ。その複雑かつ超高度な術式と言語は、このあたしでも理解不能な代物だよ」

「それをレティが？」

「ああ、こんなにチビでもドラグナーだからね。そして事も有ろうに、数ある竜言語魔法の中から竜化身と言われる魔法を引っ張り出し、挙句それを参考に改変し、竜を人へと変える魔法を作っちゃったって訳さ」

「それじゃあ、この男が本当に……？」

「ああ。ファフニールだ」

まさか本当にそんなことが起こりうるのか？ 最初抱いていたそんな疑念は、今はもう納得へと変わっていた。完全に腑に落ちていくわけではないが……。

だってそうだろう？ こんな絵本みたいな話、はいそうですか、っていきなり信じろと言われて返事出来るものじゃない。

だが、それしか説明がつかない話なんだ。本気になればクローネみたいな結果すら簡単に起こしうる、凶悪なドラゴンを倒せる人間なんてそうそういないわけだし。

「でも大広間は随分と酷い有様だったぞ。あれはなんだったんだ？ まさか人間になる為に戦闘でもしたのか？」

隣で舟を漕いでいたファフニールに問うと、鼻ちようちんが弾けてビックリした彼は首を振って俺を見る。

だいぶ眠たそうだな。目がまだ半開きだぞ。

「んあ？ ……ああ。あれは俺の魔力が暴走した結果だ」

「……魔力が暴走ってのは、一体どういうことなんだ？」

「俺の魔力はこの身体には収まりきらなかったのさ」

「なるほど。だから開放されたのか。……ん？ 待てよ。じゃあその開放された魔力はどこ飛んでったんだよ」

ファフニールに尋ねると、彼は視線を外して俺の隣を見る。送られた視線の先を追ってみると、そこにはレティが座っていた。

数回瞬きをした後、俺はガーネットに視線を移す。すると彼女は呆れたように小さくため息をつき、静かに頷いた。

「……まさかレティが受け止めたってのか！？」

「ああ。そのまさかだよ。あたしも最初は嘘だと思ったけどねえ……。だがたしかにこの子の内には黒竜の魔力が宿ってる。1年経って少しずつだが、その力の片鱗を見せつつあるようだねえ」

「え？ ちょっと待てよ。1年？」

「ん？ ああ、それがどうかしたのかい？」

……ファフニールがもう既に、1年も前からあの洞窟内にいなかったと？

一体あいつらは何やってたんだ？ 見回りいつからサボってたんだよ……。つと、だが今はそのおかげで、事実を誰にも知られずに済んでるんだけどな。

しかしどうしたものか。俺はファフニールの討伐を命じられてこの大陸に来たってのに、肝心のファフニールはまるで恐怖も脅威も感じないただの人間になってる。力もなくなったみたいだし……。

頭を悩ませていると、ガーネットが何かを思い出したように声を上げた。

「そう言えば、ヴィクトルはファフニールを倒しに来たんだろう？
これからどうするつもりだい？」

そう。まさにそれなんだよ、問題は。どうすりゃいいのかさっぱり分からん。

すると彼女の言葉を聞いたファフニールが、鼻ちようちんを再度割って跳ね起きた。

「なに！？ お前俺を倒しに来たのか？！」

「……ああ。姫様からの命令でね」

「そうか……。それで、俺を殺すのか？」

そう言うなりファフニールは真剣な眼差しで俺を見据える。俺も彼を見返すと、真紅の竜の瞳が俺の目に飛び込んできた。

恐怖も脅威も感じはしないが、黒竜だった時の気高さや威圧感のようなものは、未だ衰えていないように思えた。

しばらく俺たちは見合っていたが、誰かの視線を強く感じ、そちらの方へ振り向いた。するとレティが少し悲しそうな瞳で俺を見つめている。殺さないでほしい。言葉は発せられていないが、俺にはそう言っているように感じた。

ファフニールが階段から下りて来た時、レティのとても嬉しそうな表情を見ているし……。本当に純粋な気持ちで、彼が好きなんだろうと思う。

しばらく悩んだが、俺はある1つの提案を思いつき、それを男に振り返ると同時に発言した。

「なあ、なにかお前を倒したって証明できるアイテムはないのか？」
「ん？　なんだ、殺さないのか？」

「……ああ」

「そうか」

一言そう呟いた男は、どこか嬉しそうだった。彼だけじゃない。レティも、そしてガーネットですら少し安堵したような表情をしている。

「アイテムか……。ん？ ああ、そう言えば――」

「なんだ？」

「俺が人間になった時にな、開放された魔力が嬢ちゃんを直撃したんだ。それで気を失った嬢ちゃんを抱き上げる時に、俺は“涙”を流した。まだ混沌の洞窟にあると思うんだがな……」

「涙？ ……ってこれのことか？」

インナーの首元に納めた宝石のことを思い出し、俺は手に入れた涙形の石を再度取り出した。

手の平で淡い色に変化していく謎の宝石を、テーブルを囲む4人が見つめる。するとファフニールが大きく頷いて、落ち着いた調子で話し始めた。

「よく見つけたな。それが至高の宝石、ドラグルフティアーだ」

「ドラグルフティアー？」

「そうだ。竜が極稀に落とす涙が結晶化したもの。竜涙石とも呼ぶがな。まあ、黒竜の時ならもっとでかかったろうけど。……だがこいつは、竜の種類によって石の特性が変わるからな。間違いなくこれは唯一無二の黒竜の涙だ」

「……でも知ってる奴いるかな？」

「ブリタニアなら記録くらい残ってるだろう。記憶に在るぞ、1人黒竜を倒した男がな……」

黒竜を倒した？ ……あつ。もしかしてカロンか？ って……まさかカロンは黒竜を倒したからライオンハートになれた、のか？
そしてその証がこの竜の涙？ ……てことは、俺もこれでライオン……いや……。

倒してないんだぞ？ 証を拾っただけだ……。そんなことでなれるわけないし、そんな事でなくても意味がない……。んだけど……。

「どうした？」

「え、あーいや……」

期待感と申し訳ない気持ちとで複雑な表情をしていたのだろう。そんな俺をファフニールは訝しげな表情で見ている。

視線を外し、もう一度手の平に乗った宝石を見た。

涙の形をした、光の加減で様々な色へと変化をする不思議な石。

陽にかざすと七色に輝く至高の宝石、ドラグルフティアー。

果たして俺が持っていてもいいものなのだろうか？ でも証として持って帰らなければ、倒した証明にはならないし、信じてはもらえないだろう……。

あつ。肝心なことを思い出した。

「そうだ。駐屯地の騎士達を信じ込ませなきゃならないんだ」

「どうしてだ？」

「どうしてって、そりゃそうだろ。俺なんか黒竜を1人で倒せるわけがない。ガーネットだって、4人いてようやく封印できたんだろ？」

ガーネットへ視線を移すと、彼女は足を組み、少しつまらなさそうな顔をして俺を見返す。

「まあねえ。あたしらでもまともに戦えば勝ち目はなかったかもし

れない。というか、あんた手抜いてたんだろ？」

そう言ってファフニールを見ると、彼は肩をすくめて小さく呟く。

「まあ、戦うことに疲れたからな」

「疲れた？」

「ああ……。しかし、これからどうする？」

そう聞かれ、俺は腕を組んで頭を悩ます。眉間に皺を寄せながら考え込んでいると、ガーネットがとある提案をしてきた。

「一芝居打つ、ってのはどうだい？」

「芝居？」

「そうさ。あたしも随分洞窟には行っていないしねえ。管理者としてそれもどうかと思うだろう？ だからいい機会だ。あんたとあたしで洞窟に赴き、そして倒したって事にすればいい」

「……なるほど」

「それに、壊れたアメジストの回収もしておきたいからねえ」

ガーネットは髪をくるくると弄りながらそう言うと、肯定しろと言わんばかりの威圧的な視線を投げかけてきた。……そんな顔されたら縦に首を振るしか出来ないだろうが。

顔を引きつらせ、頷きながら返事をする。

「……そうだな……。よし、それでいこう！ ガーネットがいれば、きつとあいつらも信じるだろ」

「なら早速行くかい？」

「そ、そうだな、早い方がいい」

そうして俺はガーネットと共に魔女の帽子屋根の家を出て、まず

ロザリア騎士団駐屯地へと向かった。

魔女の魔法

駐屯地へ向かう道中、ガーネットは家へ帰って来た時と同様に、箒に乗って移動している。

俺も乗せてくれ、そう頼んでみたが、「これは1人乗りだから」と断られてしまった。

ウィッチは便利な乗り物があったいいな。

それにガーネットは、どうやら俺の歩速に合わせて飛んでくれているようだった。速度を上げれば、あのおかしな馬車よりも早いのだ。

その心遣いに感謝しつつ、迷惑をかけまいと俺は駐屯地へと急いだ。

そうして歩くこと10分。

駐屯地に着くや否や、外で1対1の模擬戦をしていた騎士達が俺に気付くと揃って声を上げた。するとその声を合図に、設置されたいくつものテントから次々に騎士達が出てくる。

毎度の事ながら大層な出迎えだと思う。

ゆっくりと団員達の元へ歩いていくと、その視線が俺ではなく、全て隣の人物に注がれているのに気付いた。

しかもその目付きは妙にウツトリとしたもので、皆が皆恍惚とした表情を浮かべている。そして口々に声に出して言う。『ガーネット様……』と。

……俺の出迎えじゃないのかよ！ まったく、こいつらは——
——ん？

ふと魔女に目をやると、なにやらもの凄く鬱陶しそうな顔をして

俺を見つめていた。

今にも火炎をお見舞いしそうな雰囲気だ。しかし、騎士達はその表情に気付いていないのか、熱い歓声は更に声量と大きさを増していく。

我慢ならないのか、やがて彼女は左のこめかみに青筋を立て、

「あー！ いちいち煩いんだよっ！！ 少しは黙ってな！ 燃やされたいのかい？」

そう言って手の平を上に向け、一瞬にして火球を出現させた。それを見た騎士達はビクつき、一斉に後退る。

……これが魔法か。間近で見た本物の魔法に驚いていると、彼女はイラついた調子で言った。

「何やってんだい、さっさと行くよ！」

そうだった。俺はこれからもう一度混沌の洞窟に入るんだったな。箒を片手に、背中を向けて歩き出す彼女に続こうと踵を返したところで、俺は団員達に急に呼び止められた。

「団長！ 今からどちらへ？」

「ん？ あ、ああ。……ガーネットと共に、ファフニールを、倒してくる」

うむ。なかなか嘘が上手くなったな。多少目が泳いだが、これくらいなら及第点だろう。

するとその言葉に騎士達は、また盛大に湧き起こった。

『団長！ ずるいですよ。俺たちも連れて行ってください』

……何がずるいんだ？　　と言うか、こいつらが来たら全てが水の泡じゃないか。そもそも俺がこの大陸に来た意味すらなくなっちゃう。

しかし、ガーネットは人気者だな。まあ、見た目だけなら美人だと思う。色っぽいし、艶っぽいし……見た目だけなら……。

と言うか、何で俺はこうも女運についてないんだ？　黙ってれば美人って割合が多い気がする。

姫も見た目だけなら綺麗で可愛いと思う。ルチアさんだって小言や悪戯さえなければ十分美人だし……。シャスティもただ突っ立ってるだけなら可愛い方だろう。

はぁ、なんだか泣けてくる。

ため息をつきながらも、騎士たちへのなにか旨い断り方はないかと考えていると、とうとう堪忍袋の緒が切れたのか。魔女は怒りの表情を露に振り返り、そして作り出した50cm程の火球を団員達の足元すぐ傍に投げつけた。

すると火球は地に接すると同時に巨大な火柱となって上がり、大地を抉って砕けた岩石と一緒に巻き上げる。

一斉に尻餅をつき大層驚いた様子の団員達に、ガーネットはドスの利いた低い声で言い放った。

「もし付いて来るってんなら、今度は貴様達に当てるからねえ」

その恐すぎる目付きと調子に、全てのものが震え上がり、大きく頷くことしか出来ないでいる。

ふんっ、と鼻を鳴らして駐屯地を出て行くガーネットを、俺は思わぬとばっちりを食わないように急いで追いかけることにした。

森の中で唯一舗装された道路。そこを俺は歩いていく。ガーネットはと言うと、さっきと同様、また空を浮遊している。

10数分して、ようやく着いた混沌の洞窟入口。初めて来た時は、一体どんな奴なんだろうと思ってびくびくしていたが、今はこの洞窟が少しばかり寂しく目に写る。

黒竜……。一体どんな姿をしていたんだろうな。もうフアフニールは、元の姿には戻る事が出来ないんだろうか？

考え深げに洞窟を眺めていると、ガーネットの咳払いが聞こえた。

「オホン！ さて、そろそろいいかい？」

「え？ あ、ああ。そうだな、そろそろ行こう」

返事をした俺は、肩から斜めに掛けた革製の鞆の中から携帯松明を取り出す。それを見ていたガーネットはなぜか制止した。

「なにやってんだい？」

「なにして、松明だよ。見て分らないのか？」

「分かるわ！ そういうことじゃない。そんな物はいらないんだよ」

そう言うと、訝しむ俺を余所に、彼女は空中に魔法陣を描き出す。白いような銀色のような魔法陣は発光し、クルクルと回転すると、ガーネットの詠唱と共に収縮を始めた。

「彼方より来たりし光明、闇を照らせ、ウィル・オ・ウィスプ！」

名前を口にした瞬間、魔法陣から光の玉のようなものが出現し、それは少しずつ形を変えていく。

まるで毬栗いがりのようなとげとげとした“そいつ”は、目らしきものをガーネットに向けると声を発した。

「あー、今度はガーネットか」

「なんだいウィル、レティの方がよかったかい？」

「いや、そういうわけじゃないんだけど……」

ウィルと呼ばれた栗頭は、なにやら手らしきものをもじもじとさせ、とても気まずそうな目遣いでガーネットを見ていた。

「……って、なんだこいつは?! 光が喋ったぞ!」

「いちいち驚くんじゃないよ。こいつは光の精霊さ」

「光の精霊? こいつが……精霊?」

初めて見たが……まあ、第一印象はなんと言うか……。愛嬌のある奴だな、と思った。どこか憎めない顔をしている。

「ん? ガーネット、こいつは誰?」

「ブリタニアの騎士団長だ」

「ああ。偵察か何か。ボクはてっきり新しい男でも出来たのかと——」

「燃やされたいのかい?」

「ヒッ!」

口元に不敵な笑みを浮かべながら、魔女は凄んでウィルを脅している。すると蛇に睨まれた蛙のように目を点にし、冷や汗のようなものをだらだらと掻きながら精霊はゆっくりとUターンをすると、手らしきものを掲げて言った。

「は、張り切って探検しよう!」

そしてウィルは軌道を一寸足りと逸らすことなく、真っ直ぐ洞窟内へと入っていった。

その様子を肩をすくめ、やれやれといった様子で見届けると、彼女はウィルに続いて洞窟内へと消えていく。

俺も慌ててその後を付いていくと、思いのほか洞窟内が明るかったことに驚いた。まるで外と変わらないくらいに明るい。どんな闇でも明るく照らす能力。これが光の精霊の力か。

しかもどうやらこの精霊。この洞窟内を熟知しているようで、地図を見せなくても最短ルートを通っている。

ガーネットの話によると、レティがこの洞窟に通うようになって、ウィルは否が応にも地理を覚えさせられたんだそうだ。

そうして約15分。再び俺は、混沌の洞窟最奥の大広間へと戻ってきた。するとガーネットは着くや否や、懷から小さく折り畳んだ袋をいくつも取り出して俺に手渡す。

訝しんで見ていると、彼女は呆れた様子で言った。

「なにやってんだい。さっさとアメジストの欠片を拾うんだよ!」
「なんでだよ?」

「あたしが魔法使ったら全部溶けちまうだろう。だから今のうちに拾っとくんだよ」

「いや、でもなんで俺が――」
「ごちゃごちゃ言っていると、一緒に燃やしちまうよ!」

うおっ! ……目が本気だ。ここは素直に従った方がいいな。

しかし、よほど大事なものらしい。俺が袋に碎け散ったアメジストの欠片を拾い入れている最中も、ガーネットはあっちにも落ちてくるだの、まるで工事現場の監督のように指示を出してくる。

……完全に尻に敷かれるな、これは。

ようやく全ての欠片を集め終わると、なんと5袋分にもなった。パンパンに膨らむ袋の腹をポンポンと叩き、魔女は満足げな表情を浮かべている。

だがしかし、そもそもの目的はこれじゃない。

「なあガーネット、ところで芝居ってどうすればいいんだ？ まさか空気を切ってろ、なんて言わないよな」

「お前は馬鹿かい。そんなちまちましたことはしないさ」

「じゃあどうするんだよ？」

「あたしが数発魔法を放つ」

「それで？」

「それだけだ」

……それだけって。その一体どこが芝居なんだよ、っとツツコミたくなったが、ここはグツと言葉を飲み込んで我慢だ。

「例え倒した後でも、偵察や巡回はするんだろう？」

「え？ あ、ああ。まあ、多分……」

「なんだい、歯切れが悪いね」

いや、断言したいけど……あいつらサボりそうな気が……。

「だから激しい戦闘があったって事を装う為にだ、あたしが“禁術”でここを壊す」

「禁術？ いや、それよりも壊すって」

「もちろん手は抜くさ。こんなところにも自然はあるからねえ。それに、全力なんて出したらこの洞窟自体すっ飛んじまうさ」

「そんな威力なのか？」

「まあね」

得意げな表情で鼻を鳴らすガーネット。俺は想像も出来ないその破壊力に、ただ開口し唾然とするほかなかった。

「さて、始めようかね。まずは外にも聞こえるような爆音をたてなきゃならないか」

魔女は空中に再び魔法陣を描き出す。赤い円は今までのよりも大きく、しかも炎で縁取りされていた。小さく息を吸うと、ガーネットは静かに魔法の詠唱を始める。

「煉獄の火、爆ぜる炎、集いし獄炎の焰。いくよ！ インフェルナルブレイズ！」

魔法名と共に円から飛び出した炎は大多数の小火球で、最奥の岩壁に向かって、それらは各々違う軌道に乗り一箇所目掛けて飛んでいった。

数多の火球はそれぞれがぶつかり合い、そしてその大きさを肥大させていく。やがて全てが集まると、火球は3 m程の大きさになり、轟音と共に弾けるように爆発した。

砂煙を巻き上げる爆発地点の岩壁は大きく抉れ、そして10 m程に渡って溶けているのが見えた。

「すげえ……これが禁術……」

「はぁ？ 何言ってるんだい。こいつはまだ序の口。これから使うのが禁術さ……」

「えっ?! これより強いのか?」

「まあね。だが、思いのほかやることがありそうだからねえ。随分威力は落ちるだろうが……」

そう言いながらガーネットは次の準備に取り掛かる。

一瞬にしていくつもの魔法陣を宙に描くと、それらに魔力らしきものを送った。するとそれらは輪を大きくしながら、広間の内周よりも2回りほど小さなサイズまで広がり、各々縦に並んで定位に

つく。

目視出来るその形は円柱のような立体だ。そして更に彼女が魔力を送ると、6つの魔法陣はそれぞれ動き、扇形に広がると同時に半円球のドームを形成する。

間近で行われているウィッチの魔法に、俺は唾を飲み込んで見入った。

すると彼女はまた新しく魔法陣をいくつも描きだす。先程描いた6つのカラフルな魔法陣ではなく、最初の時みたいな赤い色のものだ。

するとその内の一つが俺の足元まで飛んできて、赤いフィールドが下から俺を包む。他の魔法陣は、広間の植物や湖に対して飛んでいく。

何事かと思っていると、ガーネットは振り向き様に言った。

「これから使う禁術は、いくらパワーセーブするからと言っても桁違いの熱量を持ってる。そいつは火に対してのレジストの最高位魔法さ。なかったら多分消炭になっちゃうだろうからねえ」

「じゃあ、あの木や湖に対しても？」

「あたしはこう見えても自然が好きなんだ。……出来ることなら残してやりたい。多分、無理だろうけどね」

憂いを帯びたような、少し残念そうな顔をして彼女は目を伏せた。ガーネットなりの思いやり、か。意外な一面を見れたな。

「ヴィクトル、そこから出るんじゃないよ」

「ああ、分かった！」

返事をするときガーネットは一瞬笑顔を見せ、こちらに背を向けると巨大な炎の魔法陣を描く。

その手際は舞うようで、美しく華麗としか言いようがなかったが、描かれた魔法陣からは今までに感じたことのない恐怖を感じた。冷たい汗が背筋を伝う。

紅蓮の魔女の異名の通り、彼女の周囲を真紅の炎が渦巻いて飛び交う。魔法陣からは轟々と火炎が噴出し、その熱は凄まじく、レジストされてなかったらと思うとゾッとする位に熱い。

ドレスの裾を対流する風によりなびかせながら、彼女はぶつぶつとなにやら言語を話している。すると魔法陣の炎が更にその勢いを増した。まるで何かの紋章のような形に魔法陣から伸びていく炎。広間中を赤く染め上げる程の光を発すると、ガーネットの周囲を渦巻く火炎が、魔法陣の中央へと徐々に流れ込んでいく。そしてタイミングを見計らったように魔女は詠唱に入った。

「全てを無に帰す紅蓮の火。無から出でし祖、火炎となりて煉獄に落つ。焼き尽くす爆炎、深き地に落ち轟炎となれ。地獄より還りし祖、紅炎となりて灼熱を纏え――」

するとガーネットの周囲を取り囲んでいた炎は、彼女の背中でするで翼のような形を形成すると、一気にそれが大きく開いた。――と同時にいくつもの羽炎が宙を舞う。

地に舞い落ちた炎の羽は、地面を焦がし、そして溶かす。

詠唱も終わりに近付いているのだろうか。ガーネットの周囲の炎が更に勢いを増していくのが分かる。

「我、汝に命ず。守護の楔解き放ち、血の盟約に従いて、仇なす全てを滅ぼさんことを……メルト・フレア！」

詠唱の終わりと共に放たれたガーネットの魔法。メルト・フレアは魔法陣から一気に解き放たれ、ドーム内側の天辺付近で留まりい

ったん静止する。そしてこの場にある全ての火炎を取り込もうと、火球はそれらを吸い寄せていき肥大していった。

巨大な火の玉の表面は溶岩のようにドロドロとしており、渦巻く炎に包まれていて、まるで太陽のようだった。

あまりの熱さに汗を流しながら啞然としていて、一瞬火球が閃光を放ったと思った次の瞬間、メルト・フレアは一気に膨張し光に包まれ大爆発を起こした。

轟音が大気を震わし、一面砂煙と焦げ臭い匂いで充満し、何が起こったのかを認識するまでに時間がかかりそうだ。

やがて砂煙が落ち着きだすと、目の前にガーネットが立っているのは確認できた。前屈みで膝に手を付き、肩で息をする彼女に駆け寄ると、俺は肩を貸して支える。

「大丈夫か？」

「まあ、ね……。無駄にMP使っちゃったから……。ちよっときつかったか、ね。おかげでMP空になっちゃったよ」

そう言うてはにかむ彼女に、俺は微笑み返した。

「しかし、すげーな。これが禁術の威力か……。って、そもそも禁術ってなんだ？」

「禁術ってのは、遥か昔に失われた魔法さ。敵味方問わず蹂躪するあまりの威力に、封印されてたんだよ。……。これでも3割の力だねえ」

……。これで、3割？　まるで勝てる気がしねえな。俺は身震いしながらあることを思い出した。

団長が昔言ってた。ウィッチは魔法を使うが、懐に入れば勝ち目がある。

たしかに力は騎士の方が強いかもしれない。でも近づけなかったら意味ないじゃないかよ！

ガーネットは敵に回したくないな……。

考えながら呆然としていて、ようやく視界が鮮明になってくる。まだ少し霞んではいるが、俺は事の結果を見ようと辺りを見渡した。すると目に飛び込んできた光景は、息を飲むほど凄まじいものだった。

ドームの中は隕石が落ちたようなクレーターになっており、そのあまりの熱量に溶けた岩盤が中央でマグマ溜りを作り、穴の縁は隆起して波打っていた。

ドーム内の植物達は焼失し、湖の水はほぼ蒸発している状態だ。ドームの外の植物や木は辛うじて無事なのもいるが……。

そして岩壁。ドームで遮断されていたにもかかわらず、その熱で軽く溶解している。

俺は改めて惨状の全景を見る。

ファフニールの魔力の暴走跡は壁面の溶解により、跡形もなく綺麗に消え去っている状態だ。

言葉を失う俺に、ガーネットは小さくため息をつき声をかけてくる。

「さて、そろそろ帰るかい」

「あ、ああ、そうだな。でも歩けるのか？」

「なに言ってるんだい、あんたがあたしをおんぶするんだよ！」

「えっ?! なんでだよ」

「あんたの為にこんなとこまで来たんだろ。それに、MP空になっちゃまったし……これじゃ帰り飛行できないだろう？」

……なるほど。というか、飛行するのにMP必要なのか。……ま

あ、いいか。世話になったしな。

ガーネットに背を向けた状態で俺はその場にしゃがむ。

——しかし待っていても一向に体重が乗らない。疑問に思い、俺はガーネットに振り向いた。すると彼女は自分の身体をサッと抱くようにして言った。

「変なところ触るんじゃないよ？」

「触るかよ！　ったく」

「ああ、アメジストも持ちなよ？」

「え？　ああ、そうか。……って、荷物が多い気がするんだけど！？」

「そんなことは知らない。ごちゃごちゃ言わずにさっさとしな」

まったく、最初からこれが目的だったのかと疑いたくなるな。

そうして俺は渋々ガーネットをおんぶすると、彼女に携帯松明を持たせ、自分はアメジストが詰め込まれた5袋もの荷物を両の腕に下げて洞窟を後にした。

口付けの後……

重い紫水晶の欠片が入った袋5つ。その内の1つの手提げの輪の部分には、ガーネットが持っていた大きな箒が差されている。それとおまけで人1人。女一人だけならいざ知らず……これは明らかに重量オーバーだろ。

先程とは違った汗を掻きながらも、俺はなんとか洞窟を脱出することが出来た。外へ出るともう夕方、背の高い木々の合間からオレンジ色をした木漏れ日が射してくるのが見える。

橙色の光を見つめながら物思いに耽っていると、不意に背中から声が聞こえた。

「何してんだい。さっさと帰らなきゃ夕飯の仕度が遅れるだろう？」

「え？ あ、ああ、そうだな……。あ、その前に駐屯地寄ってもいいか？」

「ん？ ああ、そうか。なら仕方ないねえ、さっさとしな」

うっ……。完全に尻に敷かれてるじゃないか。というか、なんでここまで高慢なんだ？

もう少し可愛らしい態度はとれないものなのか？ いや、笑った時の顔は可愛かったが……。それに、こんなことに付き合ってくれたことに感謝はしてる。してるんだが……。

項垂れながらも俺は駐屯地を目指す。するとガーネットに「シャキッとシなシャキッと」と喝を入れられる始末。なんだろう、もの凄く惨めな感じが……。

小さくため息をつき、頭を振った俺は足早に駐屯地を目指した――

」。

洞窟を抜けるのに思いのほか体力を消耗したのか、駐屯地に着くに30分も掛かった。さすがにガーネットもこれくらいは許してくれるだろうと思っていたが、考えが甘かったらしい。

「見ろ、もう夕陽が沈んじまうだろ」とか「レティが夕飯食べずに寝ちまうだろ」とか。俺の背中でごちぐちと文句を垂れられた。

終始俺は顔をしかめていたんだろうな。

そうした苦労の甲斐あって、こうして駐屯地までなんとか辿り着いたのだが……。

夜を迎えようとしている駐屯地は松明に火が灯され、野営地独特の雰囲気醸し出していた。騎士たちが勢ぞろいして整列し、心配そうな顔をして。どうやら俺たちの帰還を待っていてくれたようだ。達成感溢れる顔をして、意気揚々と彼らの元へ歩いていくと一斉に声が上がった。

『ガーネット様！ ご無事ですか！？』

……俺の心配じゃないのかよ！　ったく、こいつらは。……ん？

耳を澄ますと、おんぶしている魔女から、くぐもった声その喉元から聞こえてくる。

すると次の瞬間、俺の顔の右側で煌々と赤く明りが灯ったのに気付く。なんだと思いきやちらへ視線を向けると、ガーネットが手の平を上に向け、小さいながらも火炎を放出しているのが目に写った。

驚いて仰け反るも、彼女に左腕で首をがっしりと固定されており、炎との距離は変わらない。

「お、おい、危ねえ！ や、やめろ……てか炎出せるじゃねえか！」
「なに言ってるんだい、これはMPなしでも使える特殊技能の一つさ」
「特殊技能？」

「ウィッチやウィザードはMPがなくなったらただの人だろうか？
だから修行を積んでこれくらいの炎はMPなしでも使えるようにし
とくのさ。いざって時のためにね……」

いや、それは分かったが……さ、さっきから声のトーンが……だ
んだんと――？

「こんなでも1体1体なら焼いていけるんだけどねえ……」
『ヒィー！！』

始めは諭すように、静かに話しかけてきていたガーネットの声色
は、次第に凄みを帯びドスの利いた声へと変化していった。

それを見て聞いた団員達は、一斉に恐怖の悲鳴を上げて後退る。
彼女はいつもと変わらず、ふんっ、と鼻を鳴らすと俺に言った。

「ほれ、なにしてんだい。報告に来たんだろう？」

「え？ あ、ああ。そうだったな。……お前たち、もう安心しろ。
ファフニールはもういない、俺たちが勝ったんだ！」

そう声高らかに宣言すると、一瞬キョトンとした団員達はまばら
に声を上げる。

『やった……やりましたね！ 団長！』

皆一様に喜んでくれているようだ。

うむ。この嘘なら合格だな。間違いなく100点満点だ。……俺
は何もしていないがな。まあ、喜んでるんだし、平和的解決、にな

ったんじゃなからうか？

俺は苦笑いしながら踵を返し、ファフニール討伐成功に湧く駐屯地を、ガーネットをおんぶしたまま後にした――。

すっかり辺りは暗くなり、月や星々が主役の時間帯。夜の訪れと共に少し風が冷たく感じられた。草原の上を流れる風が、まるで草笛のような涼しげな音をたてて吹く。

豪奢だが、薄布のドレス一枚しか着ていないそんなガーネットが心配になり声をかけた。

「ガーネット、寒くないか？」

「ふん、ウィッチをなめるんじゃないよ。あたしがなんの魔女だか知ってるだろう？」

「火を司る紅蓮の魔女だ」

「そうさ。そうでなくても、基本ウィッチは寒暖差には抵抗があるからねえ」

「そうだったんだな……」

……なんだ、心配して損した。

少し気まぐずくなり、ふと空を見上げる。すると一筋の光が尾を引いているのが見えたため、俺は急いで声を上げた。

「あ、ガーネット。流れ星だぞ！」

「なにがそんなに嬉しいんだい。子供じゃあるまいし……」

……なんだ。感動もなにもない奴だな。

袋を3つ提げた状態で右手を上げ空を指差す俺が滑稽に見えたの

か、彼女はクスクスと笑いそして言った。

「荷物持たせて悪かったね」

「ん？　なんだ、そんなこと。まあ重いけど、トレーニングだと思えばなんてことないさ」

「なかなか逞しいじゃないか」

「いや、多分ファフニールが実際にいたら逃げ帰ってただろうからな……そうでもないよ」

苦笑しながらの一言を聞いた彼女は声を上げて笑った。初めて聞いたガーネットの笑い声に、不覚にも少しドキッとしてしまった。

……なんだ、普通に笑えるんじゃないか。俺は何故だか少しだけホッとした。

「ところでヴィクトル。あんたは何でまたこんなところまで、わざわざ来たんだい？」

「ん？　昼間に言っただろ」

「聞いたかい？　覚えてないねえ」

「……姫様にな、平和のためだと言われて、泣く泣くやってきたんだよ。……というか強制的に来させられたんだ」

「随分尻に敷かれてるんだねえ」

「縁起でもない事言うなよ。あんなじゃじゃ馬勘弁してもらいたいぜ」

自国の、それも姫君に対してそんな口を利くもんだから、ガーネットは関心を持ったように聞いてきた。

「そんなになのかい？」

「ああ。何かあればすぐ俺を呼び出すんだ。もっと暇そうな騎士は沢山いるのによ。しかも強制クエストばかり発生させやがる。副団

長だった時なんか“黒狼のクシを作れ”だもんな」

「そいつは難儀だねえ……。あたしも昔は奴に手こずったもんさ」

「——それだけじゃない。ケーキ買ってこいだの、ブランドの服を買ってこいだの面倒なお使いばかりだぞ？」

「あんたに惚れてるんじゃないかい？」

「……は？」

今、なんと？？ 幻聴じゃなければ“惚れてる”って聞こえたよ
うな……。

「惚れてる？ あの姫様が？ 俺に？！」

「……どの姫様かは知らないが、あんたに相当入れ込んでいると見たね」

「それはない！」

「そうかい？ でもそのお使いクエストっていうのは、あんたにしか発生しないんだろう？」

「うーん。まあ、そこが不思議っちゃあ不思議なんだけどな……」

「ふうー。まあ、本人が鈍感なら仕方がないかね」

……鈍感？ たしかルチアさんもそんなこと言っていた気がするが、どういうことだ？ ……まさかな。

顔をしかめながらその時のやり取りを回想していたが、不意に聞こえたガーネットのくしゃみにより現実へと引き戻される。

「へっぷし！」

「っ？！ ……ガーネットって、可愛らしいくしゃみをするんだな。意外だったよ」

「なっ！ ……いちいち煩いんだよ、燃やされたいのかい？」

団員達に発した声とは明らかに違う声色。どこか照れ臭そうな、

恥ずかしそうな文句。

「MPないんだろ？」

「さっきのがあるだろう？」

そう言う俺のすぐ真横で、先程見せたMPOで使える火炎を出して見せた。毎度の事ながら、ガーネットの腕は俺の首に回されてがっちり固定されてしまっているため、どう仰け反ろうが避けようが、炎との距離が遠ざかることはない。

「わ、分かった、からかって悪かったから、その危険なものはゆっくりと仕舞おう、な？」

弁明しようとして出来る限りガーネットに振り向いた。すると彼女の顔が思いのほか近くにあり、エメラルドを嵌め込んだような美しい翠瞳と目が合った。

その瞬間は吊り上がっていた目は、互いに見合っているうちに少しずつ角度を下げる。頬を少しだけ赤く染め、長い睫がふるふると揺れている。

炎に照らされたストロベリーブロンドの髪は、夜風にそよめき鮮やかに煌く。それと同時に、鼻腔をくすぐる甘美な香りに目眩がしそうになった。

こうして間近で見みると、少女のような可愛らしさも併せ持った女性なんだと改めて気付く。普段は傲慢さが際立っている為、そうした部分はすっかり影を潜めてしまっているが――。

……めちゃくちゃ綺麗だ。というか、今更ながらこのシチュエーションにドキドキしてきた。やばい、なんかチャンスなような気が……。

この機に乗じて、口付けでもしてやろうかと妙なテンションにな

り、俺はガーネットの目を見つめながら徐々に顔を近づける。

しかし彼女は気付いていない様子。それもそのはず。近付いていることは近付いているのだが、秒間1mmも進んでないほどに遅く遠い。腕でしっかりとホールドされてしまっている為、思うように動けないでいたのだ。

俺がちんたらしていると、彼女は急に目線を外し正面を見据え、そして言った。

「ああ。もうすぐそこじゃないか」

「えっ？」

そう言われ俺も視線を戻す。確かに、前方には魔女の帽子屋根の家が目視出来る距離に佇んでいた。

玄関ではかぼちゃ型のランタンに明りが灯り、部屋からはカーテンの隙間から温かそうな家庭の明りが洩れている。

それを見た瞬間、俺の口からなんとも情けない、残念そうな、心残りの声が毀れた。

「……あっ……」

「なんだい、その残念そうな声は？」

「えあ？ いや、なんでもないさ……」

「もしかして、まだあたしと2人きりでこうしていたいのかい？」

「ち、ちが……。違うに決まってるだろう！」

「あはは！ あんたは面白い男だねえ、ヴィクトル。気に入ったよ」「え？」

何故か心が躍った、ような気がした。

しかし……なんで俺は“そうだ”って言えないんだよ！

……でも、これでよかったのかもしれない。もしキスなんかしようなものなら、きっと今頃火だるまにされていたかもな。

それもこれも、ガーネットからいい香りがしたのがいけないんだ。そうだ、そうに違いない。

ただでさえ美人なのに、間近であんな頭がくらくらしそうな匂い嗅がされたら、チャームに掛かったようなもんじゃないか！

だが、ガーネットに気に入られるっていうのは……ぜんぜん嫌じゃない。むしろ嬉しかった。でも、あんな凄いもの見せられた後じや、ちよつと心境複雑だけどな、色々と。

物思いに耽っていると、とうとう魔女の家へと着いてしまった。

玄関手前の小階段を上り少し屈むと、ゆつくりとガーネットは地面に足をおろし、そして地に降り立った。なんだかこれでお別れだと思うと、急にもの凄く寂しい気持ちが胸中を占領していく。

紅蓮の魔女はゆつくりと玄関へ歩いていく。そしていったん立ち止まるとこちらに振り向いた。

人工の明りに照らされたガーネットの髪は、ピンクの上に橙色を写してふわりと踊る。シルクで織られたドレスの裾はやわらかく揺れた。

2つの翠瞳が揺れながら俺を見つめている。俺はその瞳を真っ直ぐ見つめ返すと、不意にその距離が一気に縮んだ。

何事かと思った次の瞬間――ガーネットの唇が俺のと重なった。

「んむう?!」

一瞬なにが起こったのか理解出来なかったが、両手で頬を包まれ、柔らかな唇の感触が伝わってくるとうやくキスされたことに気付く。

おそらく3秒ほどの短い時間だったが、とても長い時に感じられた。うるさいくらい鼓動が脈打つ。

ゆつくりと顔を離すガーネットは、顔を赤くしながらにこりと微

笑み、そして笑いながら言った。

「あんたがさっき、凄くキスして欲しそうな顔してたからさ！」

「なっ!？」 し、してないだろ、そんな顔！」

「あはは! 可愛い男だねえ」

「可愛い? せめてカッコイイにしてくれよ」

「なに言ってるんだいヒョっ子の癖に。もう少し男らしくなってるからいいな」

腹を抱えて笑うガーネットは、やがて落ち着きを取り戻すと静かな口調で言った。

「夕飯、食べてくだろう？」

「え? ……いや、でもなんか気まず——」

そこまで口にしたところを彼女は遮ると、家を見つめながら言った。

「レティもきつと喜ぶと思うよ」

「レティが?」

「ああ。お前のこと、どうやら気に入ってるみたいだしねえ」

「そうなのか?」

「気付かなかったかい?」

「子供と接したこと、あんまりないからな……」

「きつと、もう友達だって言うだろうね」

「……そっか」

それを聞いて、俺は決心した。最初で最後になるかもしれない、レティ、そしてガーネットと、ファフニール、ジャックとの晚餐に素直に呼ばれることにする。

彼女が玄関の扉を開けると、中から少女が駆けて来るのが見えた。

「ババ！ わちお腹空いたの」

「んゝ、ちよっと待ってな。ヴィクトル、早く中入んな」

「ああ。じゃあ、お邪魔します」

頷き、俺はガーネットの家へと上がった。するとレティが昼の時間と同様、俺の手を取るとリビングのテーブルへと案内する。小さな手の温もりに、どこか心が落ち着くのを感じた。

別れ、そして凱旋……？

——あれから一週間で過ぎた。

あの夜の晚餐は本当に楽しかった。場を盛り上げようと、レティとジャックが歌を歌ってくれたんだ。意外にもジャックが歌上手かったのにはビックリしたが、レティはレティで凄く一生懸命だった。その様子がおかしくて、可愛くて、とても微笑ましかった。あんなに楽しい食事は今まで経験したことなかったな。

そして何より、ガーネットが実は料理上手だったことに一番驚いた。帰りが遅くなってしまったため、夕食の時間も必然的に遅れてしまったのだが、それでも俺をもて成そうと、手間をかけて料理を作ってくれた。

ファフニールは終始テーブルに座って舟を漕いでたな。ガーネットに手伝えと言われて、渋々手伝いはしていたが、合間合間に立ちながら眠ってしまうため、結局座ってろと言われたわけだ。

——本当に、楽しかった。

そんな俺は今、駐屯地のテントの中、硬いベッドの上で目が覚めたところだ。

あの晩も、泊まっていけと言われたんだが、さすがにそれは気まず過ぎるということで、俺は礼を言うとともに断って駐屯地へと戻ってきたんだ。

この一週間。俺はあの晩の約束通りに、毎日レティと遊んでいた。レティにはどうやら友達がいらないらしく、かぼちゃのジャックと、そしてファフニールが唯一友達と呼べる存在だったらしい。

そんな俺は、ガーネットが言っていた通り、レティの3人目の友達なんだそうだ。晚餐の時、レティに「明日も遊ぼう」と言われ、

こうして一週間ここに滞在していた。

……レティと遊ぶのは楽しい。だが、いつまでもこうしているわけにはいかない。俺はブリタニアの騎士団長だ。戻って報告しなければならぬ。残ってる団員たちも心配だしな。

そうしてようやく決意する。ガーネットたちに別れを告げ、このグリムガンドを離れることを――。

身支度をすべて整えると、旅行用トランクを提げてテントを出た。団員を招集すると、俺は彼らに世話になった事、そしてガーネットに協力しこの南方を護ること、それと洞窟の警備を任せることを伝えた。

すると団員たちからは『お疲れ様でした、ありがとうございます』といった労いやお礼の声上がる。

俺はなにもしていないのに、なぜか目頭が熱くなった。別れが寂しいとか、彼らの言葉に感動したとか、そんな感傷的なことじゃなくて……。むしろ、少し自分が情けなく感じたからだ。

団員たちに別れを告げた俺は、来る時に乗ったあの“とんでも馬車”に乗車する。そして普通で速度でガーネットの家へと連れて行ってもらった。

5分程して魔女の帽子屋根の家が見えてくると、俺は胸が締め付けられるような痛み、そして少しの息苦しさを覚えた。

馬車はガーネット宅の庭先で停車し、俺は下車するとゆっくりと玄関へ向かう。その足取りは重く、こんな短い距離なのに、妙に長く感じた。

そうして玄関の前まで来ると、いったん立ち止まる。大きく呼吸

をし、そして呼び鈴であるひし形のかぼちゃの鼻を押した。

家の中で鐘の音が響いているのが外からでも聞こえる。すると直ぐに住人の声が聞こえた。

「勧誘なら間に合ってるよ」

ガーネットだ。そしてそれに続くように駆けてくる足音と同時に、玄関のドアが勢いよく開く。

「ヴィクトル〜！」

レティは足に抱きつくとき、その大きくて綺麗な碧眼で俺を見上げた。キラキラとした純粋な瞳。それと同時に期待に胸を膨らませているような、そんな無邪気な笑顔。

でも、どこか沈んだ表情をした俺に気づいた少女は、首を傾げて言った。

「どうしたの？」

すると魔導書を開いていたガーネットも、それを閉じるとテーブル椅子から立ち上がり、こちらへ歩いてくる。

「どうした？ そんな浮かない顔して」

「あ、いや……」

なんと答えようか、未だ気持ちの整理がついてない心と頭で思量する。

俯いた俺のいでたち、そして後方で待機している馬車に気づいたガーネットは、少し驚いた様子で訊ねた。

「もしかして、ブリタニアへ帰るのかい？」

“ 帰る ” その言葉を聞いた瞬間、俺の足を抱く少女の表情が、一気に悲しげなものへと変化する。

俺も心が痛い。出来ることならもっと遊んであげたかった。だが、俺にはやらなければならないこと、やるべきこと、そして“ 夢 ” がある。

顔を上げると、真剣な表情で俺はガーネットに答えた。

「ああ。ファフニールを倒したことになったんだ。もう戻らないとな」

「そうかい」

呟く彼女の表情もどこか暗い。でもそれは数瞬のことで、次の瞬間にはいつもの調子に戻る。

「まああんたにも騎士団長っていう仕事があるんだ。いつまでもこんなところにいないで、さっさと帰ればいいさ」

「あ、ああ。そうだな」

どこことなく無理をしているような感じを受けないわけでもない。

ガーネットも、別れを惜しんでくれているのだろうか。

俺はその場でしゃがむと、目にいっぱい涙を浮かべるレティの頭を撫でながら優しく言った。

「レティ。友達だって言ってくれて、俺は嬉しかったよ」

「帰るの？」

「ああ。でも……また来るよ」

「本当？」

「うん。許可証はもう貰ってるしね。行こうと思えば、いつだって来られる」

「じゃあ、明日？」

少女は涙を拭きながら、震える声でそう問うた。

「いや、明日は無理かな？」

笑いながらそう答えると、上からガーネットの声がした。

「ま、今生の別れてわけでもないしね。……ああ、あんたが死ななければの話だけどねえ」

「縁起でもないこと言うなよ！」

鋭いツツコミを入れると、彼女はクスクスと笑う。もう一度、別れる前に笑顔が見られて嬉しかったよ。

ゆっくりと立ち上がると、ガーネットを見返して言った。

「きっと立派な騎士になって、あんたに認められるような男になって見せるさ」

「ふん、ヒヨっ子がいつちよ前に……。まあ、待っててやるさ」

ストロベリーブロンドの髪をくるくると弄ると、彼女は照れくさそうに視線を逸らす。こういう所は女の子らしい。

少女の頭を優しく撫でると、俺は別れの言葉を口にした。

「レティ、ありがとう。また会おうな」

そうしてガーネットに視線を戻す。

「じゃあ、行くよ!」

「ああ、元気だな」

声に背を向け馬車へと歩く。御者は徐に扉を開け、俺はそれに手を添えると中に乗り込もうとした。すると不意にレティの声が響く。

「ヴィクトルー、また遊ぼうねー!!」

その声に返事をして手を振ると、馬車へと乗り込んで魔女の帽子屋根の家を後にした。

——空港への道中、俺は今までの出来事を思いかえ……そうとしたのだが、それは出来ずに終わった。

なぜなら、ガーネットの家を出るや否や、御者は馬をフルスロットルで走らせ、猛スピードで空港まで移動したからだ。

あそこから歩いて2日ほどはかかるであろうその距離を、なんと1時間かからずに着くことが出来た。一国に一台——いや、一頭は欲しいな、この馬。……いったいどうなってる？

馬車を降り、御者に礼を言うと言と空港のロビーへと向かう。

相変わらず人が少ない。いったい年間利用者数は何人なのか、多少気になるところだな。

手早く受付を済ませた俺は、飛行船へと続く搭乗橋へ向かった。すると、ガラス越しに見慣れない船が繋がれているのに気づく。受付で間違われたのかと心配になったが、とりあえず乗船口へ向かってみる。

帰りの切符とパスポート、それとグリムガンド出入許可証を出し、係員に見せると、すんなりチェックを通された。

疑問に思い俺は係員に聞いてみた。「これは飛行船だよな？」と。すると係員はこう答えた。「これは新型である飛空艇ですよ」と。

どうやら最終テストを終え、グリムガンドを結ぶ便に配置されたようだ。これでようやく1週間ほど掛かる空の旅が、約2日で済むということになったわけだな。

以前乗ってきた飛行船よりも大型で、洗練されたデザインの飛空艇へと俺は胸を弾ませ乗り込んだ。

すると飛行船内部の豪華さとは打って変わって、その機械的な内装に落胆の色を隠せない。客室数も増え、以前の待遇はどこにもないようだ。まあ、食事だけは運んでもらえるんだが。

……ああ、あの楽しかった日々がまるで夢のように感じるほどの寂しさと侘しさ……。

だがこんなことで挫けてはいられない。今のうちに報告内容を考えておかねば……。

そう言うことで俺の2日間の空の旅は、疲れを癒すどころか、頭をフル活用して思考するだけの時間となったのだった――。

2日間の飛行を経て、飛空艇は無事ブリタニアの空港へと到着した。

約3週間ぶりにここに帰ってきたわけだ。なんだか国の空気が懐かしく感じる。が、それと同時に俺の口からは大きなため息が漏れた。

そうなんだ。ここへ戻ってきたと言うことは……悪夢のお使いクエストの日々が、また始まるうとしていることと同義である――！！

逃げ出したい気持ちを抑え、自らを鼓舞し一步を踏み出す。本当

なら走って逃げ出したいが……俺は“ここ”の騎士団長だ。そんな
みっともない真似は出来ないし晒せない。

まるで自動人形のように、勝手に足はヴァルワーレ城へ向けて動
き出す。そして空港を出ると、目に飛び込んできたのは、懐かしい
城下町の風景だった。

久しぶりに帰ってきた故郷の空気を、めいっぱい吸い込んだ俺は、
意気揚々と歩き出す。

およそ10分。街の中を歩き、ようやく城の敷地内へと足を踏み
入れた。そして俺は真っ直ぐに——騎士団寮を目指した！

……実を言うと、2日間。考えたには考えたのだが、やっぱりど
うしようか迷った。本当のことを言うべきか……それとも本当に倒
したことにするかだ。

ガーネットに手伝ってもらったことを考えると——。

ああ、そうだ……この際だから正直に言おう。

はつきり言うところの2日間、俺はあの時のガーネットとのキスが
忘れられないでいたんだ。悶々と過ごした2日間。帰るまではあの
傲慢そうな高飛車なガーネットが間近にいたんだ。この目で見られ
たんだ。

あの夜の照れくさそうなガーネットの顔が忘れられない。こんな
状態で報告内容なんか、考えられるわけがないだろう？

「はあ」

……まあ、明日でいいや。

寮のエントランスに戻ってくると、足早に自室を目指す。荷物を
適当に片付けると、まだ昼間にも関わらず、睡魔に誘われるように
眠りについた。

――翌日。

俺は朝から逃げ惑う。その理由はなんとなくだが理解してくれるものと思うのだが……。原因はルチアさんだ。

朝起きると共に、1人の騎士から伝言を伝えられた。「帰ってき
たのなら、謁見の間へいらしてください。姫様がご立腹ですよ」と。
そんなこと聞かされたら、逃げるしかないだろう？ まともに話
す内容を考え切れてないんだ。こんな状態で会おうものなら、思わ
ぬ墓穴を掘りかねない。

そうしてその翌日から、俺とルチアさんの“かくれんぼ”は続
いた。

しかしいったい誰が俺の位置を教えてるんだ？

行く先々で彼女は少し遅れてやってくる。その度に俺は、全力で
走って隠れる位置を変えてるって言うのに……。

そう疑わざるを得ないほど、ルチアさんの行動は正確で無駄がな
い。

少し体力を回復させるため、俺は公園のベンチに小休止目的で休
みに来た。だがそれが間違いだった。

不意に背後から人の気配がしたと思った次の瞬間、俺はその人物
に腕を回され首を締め上げられた。そして俺は情けない呻き声を上
げながらその人へ声をかける。

「る、ルチアさん、ごめんなさい……ごめんなさい。る――」

「ようやく捕まえました、ヴィクトル。あなた、一体何様ですか？」

「ごめんなさい、ごめんなさい！」

……情けない……。だが、ルチアさんが首を締め上げてくるのは

本気で怒ってる証拠なんだ……。こうなると、早く怒りが収まるのを待つしか手はない……。天災のようなものだからな。だから俺に非がなくても、とりあえず謝る。

「そうやって謝ってれば、私が許すとお思いですか？　あなたはいつもの……」

「ごめんなさい、ごめ——」

「女性とキスをしたらしいですね？」

——は？　……いま、なんて？　思い返してみるも、最近口付けをした女性はガーネットしかないことに気付く。

……って、なんで、知ってるんだ？　背中に嫌な汗が流れる。そして彼女は声のトーンを更に下げて続けた。

「知ってるんですよ……相手は、あの紅蓮の魔女だとか……ファフニールは人間になってることとか——」

「なっ!？」

なな……なんで、知ってる……？　あ、まさか、また誰か監視につけた、とか？

顔面蒼白になりながらも言い訳を考えていると、ルチアさんは急に大声を上げた。

「なんでなんですか!　私の気持ちも考えてください!　ウワァーン」

そしてルチアさんは泣き出した。まったくもって意味が分からなくて、さっきより締める力が強くっ?!

「ルチアさん、死ぬ、死ぬ!！」

タップして危機を知らせるも、

「死んでください」

と、そんな酷いことを泣きながらさらいと言う……。そうだ！ たしか死んだ振りすれば。

「ルチアさ、うつ……」

あまりの苦しさに咄嗟に死んだ振りをすると、彼女は我に返り、腕の力を急に弱めて俺から離れた。

「ふう、助かった」

「あ、やられました……」

安堵のため息を漏らすと、ルチアさんは残念そうな顔をこちらへ向けて、口を尖らせながら拗ねている。……いや、そんな顔されても……。

小さくため息をつき気を取り直すと、俺は悪戯を咎められる子供のように拗ねている彼女に言った。

「ところで……どうして知ってるんですか？ また俺に監視つけたんですか？ 一体それは誰なんですか？」

一言言うたび、俺は彼女との距離を徐々に縮めていく。少し上から目を覗き込むようにすると、ルチアさんの目が泳いでいるのに気付いた。

「答えてください！」

声を荒げると、彼女は一瞬ビクつき、そしてぼそぼそと答える。

「あなたのよく知る人物です……」

「よく知る？ まさか、姫様ですか？」

俺の間拔けな問いに彼女はハッとすると、元の雰囲気を取り繕って厳しく言った。

「そんなわけないでしょう。姫様はああ見えても、いろいろとお忙しいんですよ？ 暇ではないのですから」

すると俺たち以外の第三者の不服そうな声が、この噴水広場に響いた。

「あたしだって暇じゃないよ！ まったく、ルー姉はひどいんだか——あっ！！」

ん？ なんだか聞き覚えのある声……。この声……まさか——。

「シヤステイか？！」

「しまった！」

「やれやれ。忍らしからぬ浅はかな行動ですね。シヤステイ」

ルチアさんに声をかけられたメイドは、ここから少し離れた木の根元の方から歩きながら姿を現した。

だがその格好はいつものメイド服姿ではなく漆黒の忍装束で、さっきの透明状態が俗に言う忍者の固有スキル『隠密』なのだと思わずと悟った。

「だってそれはルー姉——」

「その呼び方、いい加減やめていただけませんか？」

「やだよ、幼馴染なんだからいいじゃない、これくらい」

そして俺を余所に2人は言い合いを始めた。

そう。実を言うと、俺たちは幼い頃からの幼馴染なんだ。家が近所ということもあり、昔から3人でよく遊んでいた——って。

「俺の問いに答えんかい!!」

「あーはいはい。って、あんた今頃気付いたの？ 本当に鈍感ね」

「それは私も同感です」

……いや、それは鈍感かどうかの問題じゃないんじゃない？ いや、

そんなことはこの際どうでもいいんだよ。

顔をしかめながらシャスティを見ると、走馬灯のように蘇る記憶を整理しながら訊ねた。

「今までの全部か？」

「何が？」

「俺がやらかした失敗を事細かく姫様にチクツてたのも、団長の時も、しかも今回の任務のこともか?!」

するとメイドは、まったく悪気のないような顔をして笑顔で何度も頷いた。俺はその場で肩を落として項垂れる。一気に気力がなくなった。

そんな俺を余所に、2人は次に談笑を始める。すると突然、ルチアさんがなにかを思い出したように発声した。

「あ、そうでした。こんなことをしている場合ではありません。ヴ

イクトル、姫様がお待ちです」

そう言う彼女は、項垂れたままの俺の首根っこを掴む。なにやら楽しそうな表情のシャスティも「じゃあ……」と言って首根っこを掴んだ。

そしてルチアさんは落ち着いた調子で、優しく語りかけるように口を開く。

「では、参りましょうか」

そうして俺は、まるで猫のように首根っこを二人に掴まれたまま、リリアーナ姫の待つ謁見の間へと連行されていった。

……騎士団長ともあろう者が、給仕と侍女に首を掴まれて連れて行かれるとか……。なんとも情けない。

ライオンハート

謁見の間へと続く長い回廊を歩き、ようやく俺は……俺たちは目的地に到着した。

重厚な造りの扉には王家の紋章である獅子紋と、リリアーナ姫の象徴であるユリの花が、複雑なレリーフと共に彫られている。姫の待つ謁見の間は、この扉の向こうだ。

いろいろな思いが重なり、項垂れたままため息をついた。

ここへ来る途中、相変わらず貴族たちは回廊に飾られる絵画や美術品などを見に来ており、俺はまた奴らの好奇心な視線に晒されていた。

今回はトレーニングじゃない。連行されてるんだ。しかも騎士団長が女2人に首根っこを掴まれて……。恥ずかしいどころじゃない。……こんな情けないところをガーネットに見られたとしたら、一体なんて言われるだろう。……あ、またガーネットのことを考えてしまった。

……1週間か……。――

ブリタニアへ帰ってきて1週間。ガーネットたちと別れて9日だ。みんな元気だろうか……。俺は今一度ため息をつく。

するとルチアさんは呆れた様子で言った。

「そんなことでどうするのです？ シャンとしてください、シャンと」

「分かってますよ……」

やる気のない返事をする、彼女は俺の耳元に口を寄せて言った。

「姫様には“ファフニールが人間になった”と言うことだけは伏せてありますから」

「えっ!? ……じゃあ……」

「はい。倒したと言う事だけご存知です」

ルチアさんは頷きながら微笑んだ。だが、それを見てホッとしたのも束の間。俺はその微笑と言葉の意味を、瞬時に理解すると声を上げた。

「って……き、キスのことも……報告したんですか!?!」

「はい、もちろんです。とても怒っておられましたよ」

……涼しい顔でなに言ってたんだ、この人。

ガーネットが言っていた。姫は俺に惚れてるんじゃないかと……。もし、万が一にでもそうだとしたら、怒ってる理由がそれだとしたら――。

「お、俺の夢が……」

姫様を怒らせて得した奴なんか誰もいない。もし、姫が俺に「副団長に降格!」と言えば降格され、「見習いからやり直せ!」と言われればその通りになる。もし「騎士団長から上には昇級させない!」と言えば、俺は更に高みを目指すことすら出来なくなるんだ。絶望に打ちひしがれる俺にシヤスティは、肩にそっと手を置くと明るい調子で言った。

「大丈夫! 姫様には宝石持って帰るからって、伝えてあるから」

「……そうか……。って、姫のために宝石持って帰ったんじゃないねえんだけど!」

「まあ、いいからいいから」

危機的状況に陥り多少テンパる俺を、シャスティはまるで馬でもなだめる様に落ち着かせる。隣でその様子を見ていたルチアさんは、1つ咳払いをすると言った。

「さあ、では参りましょうか」

そう言う彼女の顔は、これから起こる何かを想像してか、とても楽しそうな笑顔に見えた。

まったく、この人は……。自分に関係ないことだと思って。

訝しむ俺から視線を外したルチアさんは、俺を扉の真ん中に立たせ立ち位置を整えた。すると再び俺は2人に首根っこを掴まれる。

2人は扉を開けると、騎士団長を引き連れて謁見の間へと入った――。

リリアーナ姫は相変わらず、玉座に頬杖をつきながら偉そうに座っている。しかもその顔は、ルチアさんが言っていた通り、怒っているよう、に見える。

不貞腐れる子供のようにムスツとしながらも、でもどこか少しだけ嬉しそうに、頬をほんの少し赤く染めているように見受けられるが……。

首を掴んでいた2人は、小階段の手前まで行くとそこで手を離れた。ルチアさんは姫の元へ歩いていくと、丁寧なお辞儀をして玉座の右斜め後方へと下がる。

シャスティはというと、俺の隣で跪き、姫に向かって頭を下げた。俺はそれに続いて跪くと、メイドに小声で声をかける。

「なんでお前がここなんだよ」

「あんたには言ってなかったけど……あたしこの国の密偵なんだよね」

「そうだったのか?!」

「うん。だから姫様から、あんたの活躍から、やらかしちゃった失敗とか、色々報告してくれて言われてたんだ」

「やらかしちゃったって……。でもなんで姫がそんなこと知りたがるんだよ?」

「さあね。姫様に聞いたら?」

小声で会話しているのが耳に届いたのか、姫は不機嫌そうな口調で声を上げた。

「騎士団長ヴィクトル!」

「は、ハッ!」

「顔を上げなさい」

……やばい。本当に怒ってるのか? こんなトーンの低い姫の声は聞いたことがない。

これは本当に、もしかすると、もしかしないでも……終わったかも知れない、俺の夢。

諦念を顔に貼り付け頭を上げる。すると姫が小階段の上まで歩いてきており、腕を組み頬を赤く染めながら俺を見下ろしていた。

そんな彼女と視線が交わる。そして姫は静かに口を開いた。

「と、とりあえず……き、き、キスの、ことは……許してあげるわ」「……え?」

「か、勘違いしないで! 英雄色を好む、と言うでしょう? だからそのくらいは目を、瞑らないと……わたしの器が、小さいと思わ

れるじゃない……」

姫は手をもじもじとさせながら、徐々にトーンダウンしてそう言う
うと、次の瞬間、ビシッと俺を指差して言った。

「ヴィクトル・ノーティス！ あなたに、“ライオンハート”の称号
を与えます！」

「……………へ？」

あまりに突然のことで、俺はちゃんとその言葉を聞いたのか、聞こえていたのか不確かだ。

開口したまま呆然と姫を見返していると、彼女は何かを思い出したようにハッとして、声を上げた。

「わ、わたしの為に……竜の涙を取ってきてくれたのでしょうか……」

やっぱり……なんか情報が錯綜して伝わってるようだが……？

姫は美しい金色の髪を“くるくる”と弄りながら、“照れた様子”で俺に言う。その仕草を見た瞬間、俺もハッとして思い出した。
あの時のガーネットを……。

思い出したらなんだか顔が熱くなってきたぞ。

地に視線を落とすと、俺はしばらくあの甘いひと時を回想していたが――。

「……………ん？」

こちらへ向けられる視線を感じ、ふと姫に視線を戻すと……姫の碧眼と目が合った。すると姫は瞬時に顔を真っ赤にし、顔を両手で隠すとイヤイヤする。

……ん？　なんだ？　もしかして、俺が姫に対して顔を赤くしたものだど勘違いしているんだろうか？

呆れた様子で姫を見てみると、その後方で待機していたルチアさんが前へ出てきた。そして姫の耳元に口を近づけると、ボソッと囁く。

「姫、証を」

侍女の進言を聞いた姫はハッとして我に帰ると、俺の方へ手の平を差し出し、いつもの調子で言った。

「ヴィクトル・ノーティス。竜の涙をよこしなさい」

「え？　……あ、はい」

返事をして立ち上がると、俺は懐からネックレスを取り出す。

これはグリムガンドに滞在中、ドラグルフティアーをファフニールに加工してもらい作ってもらった物だ。

ファフニールは黒竜としての能力がまったくなくなってしまったが、人間の生活に慣れてくると同時に、徐々に手先が器用になったらしい。今では様々な物の修繕や加工が出来るようになったと言う。

だが……今はそれが逆に裏目に出てるじゃないか！

姫は目を輝かせ、まるで自分にプレゼントされようとしているかのようなネックレスを、恍惚とした表情で見つめている。

一瞬渡すのを躊躇い、いったん俺は手を止めた。すると刹那、射抜かれるような鋭い視線を感じ、ビクつきながらそちらへ目を向ける――。

その先には、ルチアさんがニコニコ微笑んで立っているのが見えた。

ドス黒いオーラを纏っているかのような、その威圧感と雰囲気、顔を引きつらせながら何度も頷く。そして俺は、渋々目の前のお姫様にネックレスを渡すと、ルチアさんは不敵な笑みを浮かべた。

……なんだ？　なんか怪しいぞ……。

とても嬉しそうな姫は顔を赤くしながら、ネックレスを広げては光りにかざし、その色彩の変化を見て楽しんでいる。

だが俺が気になるのはルチアさんだ。感嘆のため息を洩らす姫を尻目に、彼女へ視線を移す。しかしさっきまでの威圧感はどう既になく、いつも通りの無邪気な笑顔に戻っていた。

訝しみながらルチアさんを見てみると、いきなり姫様に両手で頬を包まれ、顔を正面へと戻される。

至近距離ではじめて見たリリアーナ姫の顔。目鼻立ちの整った、しかしまだ幼さの残る愛らしい顔。宝石を嵌め込んだような美しい碧眼が、揺れながら俺を見つめている。

……このパターンはもしかや……？

ガーネットの時を思い出し、身の危険を感じた俺はゆっくりと後退さろうとした。しかしそんな意思も虚しく、まるで時がスローモーションで流れていくかのように、姫様の顔が徐々に近付いてくる。顔を背けようにも、姫にその顔をホルドされてしまっている為、それも出来ない。

そして次の瞬間……。

「んむう!？」

俺の唇を……俺の、唇を……姫が……奪った……？

「っぷはぁ！　はぁ、はぁ……。な、なにするんですか?!」

「なにつて……き、キスよ……」

「そんなことは分かってますよ！ 一体どういうつもりなんですか！？」

「わ、わたしの口付けで……紅蓮の魔女の、せ、接吻を……う、上書きしたのよ……」

耳まで真っ赤にしながら、上目遣いで見上げてくる姫。その瞳は若干涙で濡れていた。

“上書き”その言葉の響きが妙に耳に残る。上書き、されたのか？ ガーネットとの……ガーネットのキスが……。

がっくりと肩を落とし、俺は今までにないくらい落ち込んだ。

その様子を見ていたルチアさんは、姫の助け船のつもりだろうか……。俺に重要なことをサラリと言つてのける。

「ちなみに今のは、姫様の“ファーストキス”です」

……なにー！！

俺は顔を上げ今一度姫を見る。姫は口元に手を添えながら、目を逸らして震えていた。

なぜここまで驚いたのかと言うと……。姫君の口付けは婚約の証でもあるからだ。

……つまり姫は本当に俺のことが好きだった、ということか。めでたしめでたし……で終われるわけがねえだろ！！

……マジでか……。頭の中も目の前も真っ白で啞然としていると、空っぽの頭の中にルチアさんの声が響いた。

「ちなみに私は2番さんです」

続いて後方からはシャスティの声が聞こえる。

「あ、あたしは3番ね」

……いったい何の話をしてるんだ。俺は目を点にしてルチアさんを見た。するとクスクス笑いながら侍女が答える。

「なんの話をしてるんだ、って顔をしてますね。実を言うと、私も、そしてシャスティも……昔からあなたの事が好きだったんですよ」

「そーそ。でも姫様の手前、言わずに我慢してたんだけどね」

「姫様からお許しを得たので――」

……許し？　俺はその意味を聞くため、ルチアさんに訊ねた。

「いったい……なんのです？」

すると彼女は微笑み、そして言った。

「ハーレムです」

……はあ？

俺はしばらく意味が分からず固まっていたが、やがてその意味を理解すると共に声を張り上げて言った。

「冗談じゃない！　俺の気持ちはどうなるんですか？！」

「そんなものは知りません」

「そんなもので……。そんなの無――」

「無理も無茶も通すのが姫様だと、以前言っただけですが？」

うっ。……まさに蛇に睨まれた蛙。彼女に凄まじると、俺は昔から反論できなかった。

……だが今は違う！ 俺はライオンハートだ！？

「俺はガーネットが好——」

ガーネットが好きなんだ……そう言おうとした俺を、侍女は一瞬もの凄い形相で睨みつける。姫様の気持ちを考えろ、そう言われているような気がした。

その一瞬で、まるで金縛りにあったかのように身動きが取れなくなり、声すら出せなくなる。

そしてルチアさんは、固まった俺にいつもの調子で話す。

「……分かりました……。では一步譲って、私は3番でいいです。ガーネットに2番さんを譲りましょう」

……いや、そう言うことじゃなくて……。俺は気が抜けたように頭こうべを垂れる。

つうかこんなハーレム、どこの誰が羨ましいと思うんだよ！ こんな癖の強い個々を相手にしてたら、精神崩壊起こすぞ。

すると自分の順番が後回しになったことを不満に思ったのか、シヤステイはルチアさんに食って掛かった。そして姫も交えての口論を始める。

なかなか貴重な場面に出くわすことが出来たが、これはチャンスだ。今の内に逃げよう。

俺は3人に気付かれないように息を殺し、気配を消してゆっくりと後退すると、後ろ手に開けた扉から部屋を出た——。

それからと言うものの、ここ3日間。今度は3人から逃げる日々を送っていたが——。

後日。国王からの呼び出しがかかり、俺はヴァルワールの玉座の間へと赴く。部屋に入ると、既に多数の人々が集まっているのが見えた。

正面に目を移すと、2つある玉座には王と王妃が座り、そして何故か王の右斜め後方に設けられた椅子には、純白のドレスを着たりリアーナ姫が座っていた。

まさかとは思ったが、とりあえず小階段手前まで行きそして跪く。

王の話を聞いて分かったが、どうやらこれはライオンハートの叙勲式らしい。俺は王妃に段上に来るように言われ、小階段を上がり2つの玉座の前にて再び跪いた。

すると王妃は見慣れない剣を取り出すと、それを抜き放ち、寝かせた刃の部分を俺の両肩に交互に一度ずつ当てる。叙任の儀式だ。

忠誠の誓いを促されると、俺は習ったとおりの言葉を口にする。

そして立ち上がるように言われ、俺はその場で静かに立った。王妃は先ほどの剣を両手で持ち、俺へと差し出すと、少し疑問に思いながらもそれを両手で受け取る。

一目見て高価なものだと分かる。剣は適度な重量があり白銀の刀身も長く美しく。柄の装飾も豪華で、まるで獅子がそこに息づいているかのように精巧だ。儀式用の剣ではなさそうだが……。

すると見かねた王は俺に言った。「これはライオンハート専用装備だ」と。そして立ち上がると同時に、1つの勲章を差し出す。

俺はそれを受け取ると、再び跪いた。騎士の剣、騎士の盾、そして獅子の紋章が入れられた勲章。『ライオンハート勲章』を手に入れた。

これで俺は名実共に……いや、実力は伴ってないだろうが――。姫にネックレスを渡したあの日を思い出した。謁見の間へ連行されている途中、俺は2人に訊ねたんだ。本当に俺なんかライオン

ハートになってもいいものなのか。

ルチアさんには「そんなの好きにすればいいと思いますけど」と少し冷たく言われたが……。

シャスティはこう言った。「まあ、運も実力の内だって!」

俺は団長の言葉を思い出した。……けど、実際は黒竜を倒していないわけだ。この国で一番強いからと言って、それに甘んじることが出来ない。

そう言う俺に、シャスティはこう返した。「実力がないんだったら、相応しくないんだと思うんなら。これから相応しい男に、実力を身に付けていけばいいんじゃない?」と。

あいつは昔から、悩んでた俺に一言。行動を起こさせてくれるよな、奮い立たせてくれるような言葉をくれる。そこは本当に感謝してるんだぜ?

——回想の終わりと共に聞こえた王の声。

「さて、堅苦しい式はこのくらいにして……」

そう言う王の顔は嬉しそうににやけている。王妃もまた然りだ。混乱する俺を余所に、王は続けた。

「今日はこの国にとってめでたい日だからな。盛大に祝わなければいかんなあ」

「そうですわね、あなた」

するとあっという間に場の雰囲気が変わる。緊張感あるものから

一変し、一気に祝福モードへ。

嫌な予感がした俺は、姫の方へ視線を移した。すると彼女は立ち上がり、こちらへと歩いてくる。

「今日は2人の婚儀だ、盛大に祝おう」

王の言葉を合図に、集まった人々は歓声に沸いた。「姫様くおめでとうー!!」、「お幸せにー」だと。

だから……俺の気持ちはどうなるんだよ!

まったく、姫が姫なら、その親もまた親だな。蛙の子は何とやらだぞ。

俺を見つめる姫の顔は、いつになく恥ずかしそうだ。頬を朱に染め、目が合うたびに視線を逸らし、上目遣いで見上げては手をもじもじとさせ、また俯く。

いや、綺麗で可愛いのは認めるさ。姫は美人だし、憧れる奴もいるだろう。俺も嫌いなわけじゃない。

それに、もっと相応しい男がきつというはずだ。まだ18だしな。俺より3つ下なだけだが……。

急ぐ必要なんてないと思うんだ。

……姫に恥をかかせたくはないが、俺の気持ちを無視しての婚儀など認めん! 絶対にだ。それが例え王族の願いであつても……。更にはハーレムなんぞもついでに認めん!

俺は剣を鞘に収め、そしてライオンハートの勲章を握り締めて一歩、また一歩と後退る。その様子に気付いたのか、姫はハッとして指をさした。

ヤバッ! ばれたぞ。

俺は慌てふためくと、その場で駆け足し、そして――

「あっ！？ 逃げた?!」

姫の声が後ろの方で聞こえた。つうか、人聞きの悪いことを言わないで欲しい。

「だれか！ ヴィクトルを捕まえなさい！」

いつもの調子で命令する姫の声。もう既に、少しだけその声も遠くの方に聞こえる。

取り押さえようとする騎士たちに、鬼の形相で一瞬睨みを利かせると、彼らに微笑みそして、ダッシュだ！

玉座の間から飛び出した俺は、ひたすら回廊を走る。団長の地獄の特訓メニューで鍛えた脚力が、こんなところで役立つとはな。俺は天国にいるであろう団長に感謝しつつ、当てもなく城を飛び出した。

流れていく街の景色の中、思い出されるは女性の顔。傲慢で高飛車で、人を寄せ付けないオーラを醸し出す女。でも人や自然思いで、本当は思いやりのある優しい心を持った女。照れくさそうに髪を弄りながら話し、頬を染めて俺に口付けした女。そして俺は猛烈に叫んだ。

「俺は、俺は……ガ―ネットが好きだ――！！！」

街行く人が俺を見る。驚きと呆れた表情で……。

俺はロザリア騎士団団長――。

ライオンハートに憧れて、ライオンハートを受勲した男。
歴史に名を刻んだことだろう。でも、今のままじゃきつと無理だ。
だが、必ずなって見せるさ！ ガーネットに認められる男にな！

——俺の名は……ヴィクトル・ノーティスだ。

ライオンハート（後書き）

『ライオンハート』をお読みくださり、ありがとうございました！
今作はジョブ・ストーリー3作目で、騎士をテーマにしたお話です。
同シリーズである『小さな魔女とファフニール』の伏線の回収として
思い浮かんだ作品で、レティたちには引き続き登場してもらいま
した。

ヴィクトルがこの後どうなったかは、ご想像にお任せします^^；

これで終わりだと思うと少し、いやだいぶ寂しいです。でも、次の
作品が待っているのので、気持ちを切り替えて、また違った雰囲気を持
った作品を書いていければなと思っています。

読んでくださった皆さま、本当にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1480r/>

ライオンハート

2011年11月15日07時17分発行